世界畫報

東郷元帥追悼號

昭和九年七月一日發行

第十卷第七號

大正十五年十一月十日第三種郵便物認可
昭和九年六月二十日印刷納本 昭和九年七月一日發行
每月一回一日發行

東京 國際情報社發行

世界画報 七月特輯 東郷元帥追悼號目次

表紙

◇『日本海々戰三笠艦上の圖』(原色版)……東城鉦太郎畵伯作
◇『日本海々戰我が艦列の偉容』(原色版)……東城鉦太郎畵伯作

原色版口繪

◇『秩父御名代宮殿下軍艦足柄に御乘艦一路滿洲國へ向はせらる』……
◇『極東大會に於ける水泳千五百米决勝戰』……
◇『スウェーデンの名流と鐵橋の美』……
◇『支那四川省の水車』……
◇『上高地明神池の幽邃境』……
◇『夏でも寒い御嶽山の遠望』……

特輯 東郷元帥追悼畫輯

◇『故東郷元帥御肖像』(原色版臺紙貼込)……
◇『日本海々戰露艦オスラビヤ沈沒の圖』(原色版臺紙貼込)……
◇『日比谷葬場へ向ふ故元帥の靈柩』(原色版)……

東郷元帥の偉勳を偲ぶ三笠艦

◇『廢艦當時の軍艦三笠の鳥瞰』(二色版)……
◇『三笠艦內の東郷元帥の居室』(二色版)……
◇『三笠艦內に殘る彈痕』(二色版)……
◇『廢艦當時の三笠艦と記念艦となつた三笠艦』(二色版)……
◇『三笠記念艦の後部甲板と記念品陳列室』(二色版)……

大提督東郷の俤を偲ぶ

◇『渡英途上の東郷乃木兩將軍』……
◇『三笠記念艦上に聖上陛下の御側近く侍する東郷元帥』……
◇『英國留學當時の東郷元帥』……
◇『東郷元帥の好々爺ぶり』……
◇『其の他、在りし日の元帥の俤を偲ぶ寫眞多數掲出』……

護國の偉勳輝く東郷元帥の國葬

◇『日比谷公園に於ける國葬の盛儀』……
◇『多磨墓地に永へに鎭まる元帥の靈』……
◇『其の他、東郷元帥薨去の前後及國葬の盛儀の模樣を數十葉掲出』……

時事寫眞彙報

◇『秩父御名代宮殿下御渡滿遊ばさる』……
◇『滿洲國の御名代宮殿下奉迎準備』……
◇『滿洲國最初の觀兵式』……
◇『滿洲國の登極大典記念武道大會』……
◇『サルバドル國滿洲國を承認』……
◇『日米親善の數々の使命を帶びて近衛公渡米』……
◇『第十回極東大會より』……
◇『其の他日滿時事寫眞多數掲出』……

本號表紙解說

日本海々戰

三笠艦上の圖(表)

この圖は、明治卅八年五月廿七日午後二時八分、旗艦三笠の艦橋の光景で、彼我兩艦隊の先頭漸く砲戰圏內に相見えんとする二時五分、我が艦隊は敵戰列に對し有名な丁字戰法に出で今しも三笠は僅かに回頭を開始した所である。中央が東鄕司令官、その右後は秋山參謀、左後は加藤參謀長(故加藤友三郎男)加藤參謀の右後で距離を測るが長谷川少尉(現海軍次官長谷川淸中將)加藤參謀長の左後は安保砲術長(現安保淸種大將)その左が伊知地艦長

日本海々戰

我艦列の偉容(裏)

この圖は、五月廿七日午後二時四十分頃の光景で、戰今や酣、硝煙煤烟相混じて檣間を鎖し、水柱奔騰して艦橋を覆ふ壯絶なる有樣である。

噫東郷元帥

嗚呼護國の大武將東鄕元帥遂に薨去さる。去る五月廿七日、日本海々戰廿九周年記念日に『東鄕元帥の病輕からず』の報傳はるや、我が國民は盡くあたかも電擊をうけたるが如く一時に憂色に蔽はれたのであつた。而して國を擧げて元帥の快癒を祈つたのであつたが、その禱りも空しく、遂に五月三十日、日露役凱旋記念日に奇しくもその偉大なる一生を終へた。國家の柱石、隨一の功臣、而も重厚、篤實、至誠、以つて國民の尊崇景仰の的であつたこの偉傑の薨去に會つて、まことに失望痛惜の淚を禁ずる事が出來ない。元帥の大功績は餘りにも周知の事で、今更ら縷々するまでもない。その一生は東西古今の史上稀に見る武勳に飾られてゐる。

弘化四年十二月廿二日、鹿兒島の加治屋町に東鄕吉左衛門の四男として呱々の聲を上げた元帥は、文久三年の薩英戰爭に始めて砲火の洗禮をうけた。爾來戊辰の役及び函館戰爭に少年海軍士官として從軍、明治四年英國留學を命ぜられ、在英八年、未來の大提督としての研鑽を重ね、明治十一年歸朝して海軍中尉に任ぜられ、トン〳〵拍子に出世して明治十九年には大佐に昇進した。同廿五年のハワイ革命騷動には居留民保護の任に當り、義和團事件にも出動、日淸役に於ける高陞號の擊沈の如きは餘りにも人口に膾炙してゐる。日本海々戰は故元帥の武勳の絶頂ともいふべく、今日かの三笠艦檣上の信號を想起するだに元帥の武勳に面接するを覺える。かくの如く元帥の永き生涯は、さながら我が日本の海軍史である。その赫々の武勳は我が日本歷史と共に不朽不滅である。

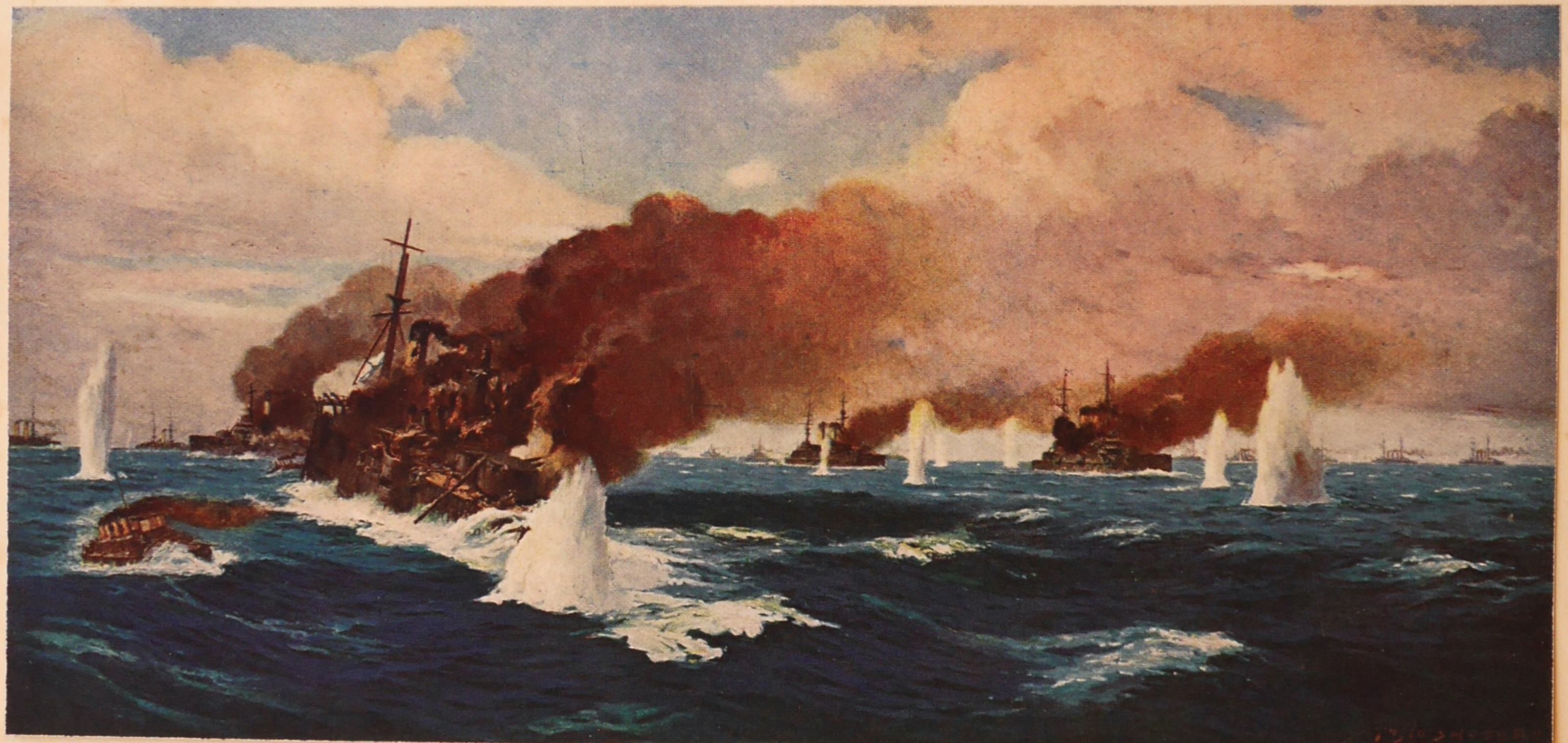
しかもたゞ武將としてのみならず、大正三年より同十年に至るまで、實に七年間にわたつて、東宮御學問所總裁として、今上陛下の乾德の玉成に奉仕した勳績もまた偉大なるものである。噫！我が國近代の偉傑、我等が無限の景慕を捧げし東鄕元帥薨去さる。謹んで哀悼の誠意を捧げる。

嗚呼　東郷元帥

千古不滅の偉勲をのこして
日本海々戦凱旋記念日に薨去せらる

肅々と葬場へ進む
東郷元帥の靈柩

蓋世の偉人、大東郷を永へにおくる國葬の儀は天地慟哭の裡に六月五日執り行はれた。この日早朝、東郷邸では最後の儀式柩前祭が悲しくも嚴かに執り行はれ、八時十五分、いよいよ靈車は發引された。この時品川沖に碇泊中の軍艦伊勢が發する弔砲第一發を合圖に横須賀をはじめ全國各鎭守府、各港在泊の帝國軍艦、横濱碇泊の英、佛、米艦よりは弔砲殷々として空に轟き、大西少將指揮の横須賀海軍機廿一機は爆音も悲しく帝都に飛來、空から弔意を表した。東郷邸を出た葬列は、警部、軍樂隊、儀仗兵、司祭、司祭副長、司祭長、銘旗、元帥刀勳章、靈柩、喪主、親族、所定諸員、葬儀委員長、同副委員長、同委員、軍樂隊、儀仗兵の順序で、富士見町停留所角を右へ、青葉通りを日比谷葬場に向け、哀愁を奏でる軍樂隊の葬送行進曲につれ、沿道に堵列する市民の涙の裡を肅々として進んだ。（寫眞は靖國神社前富士見町を半藏門の方へ進む靈柩）

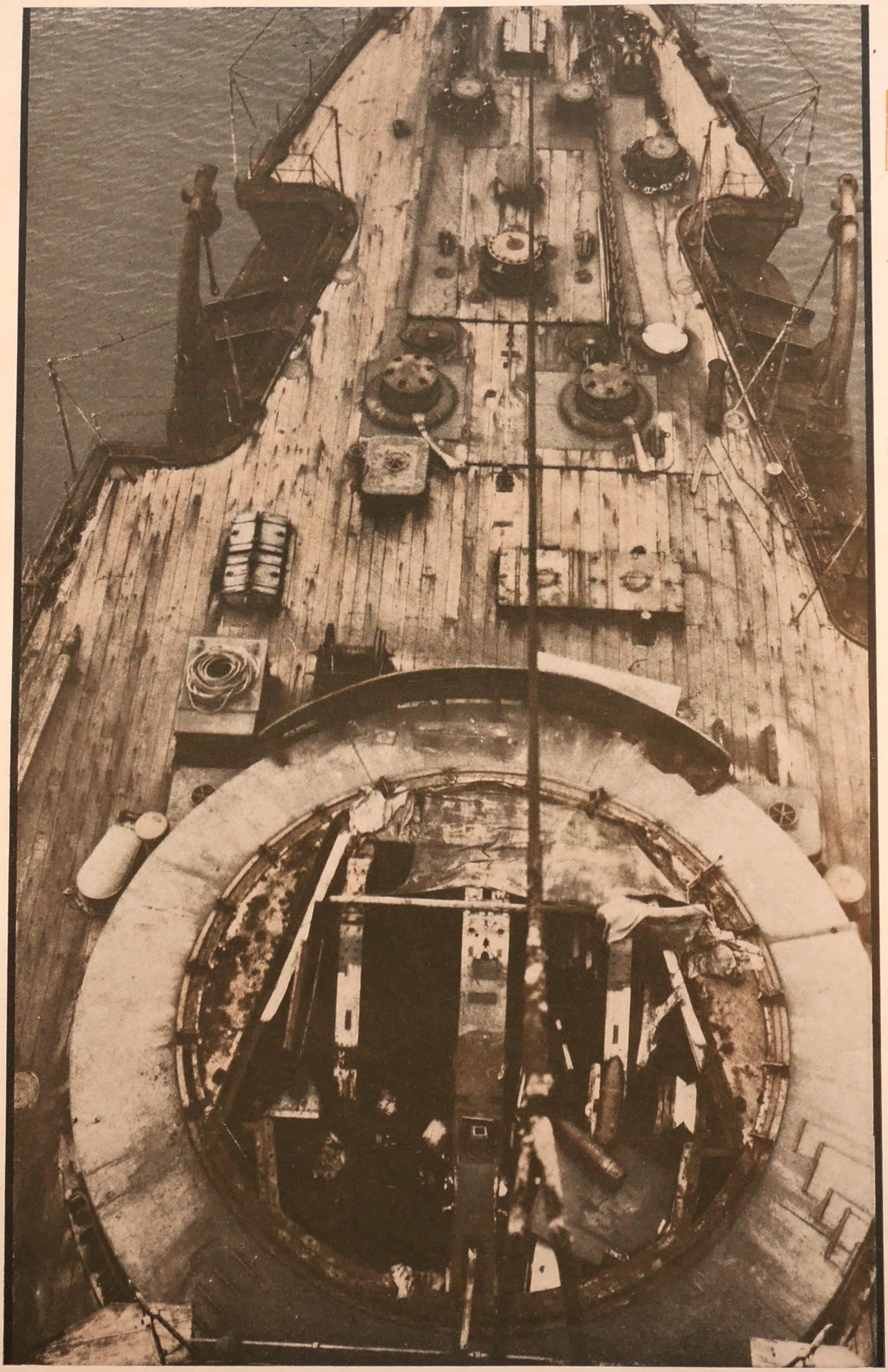


東郷提督の偉勲千古に輝く日本海々戰

『露艦オスラビヤ泥没の図』

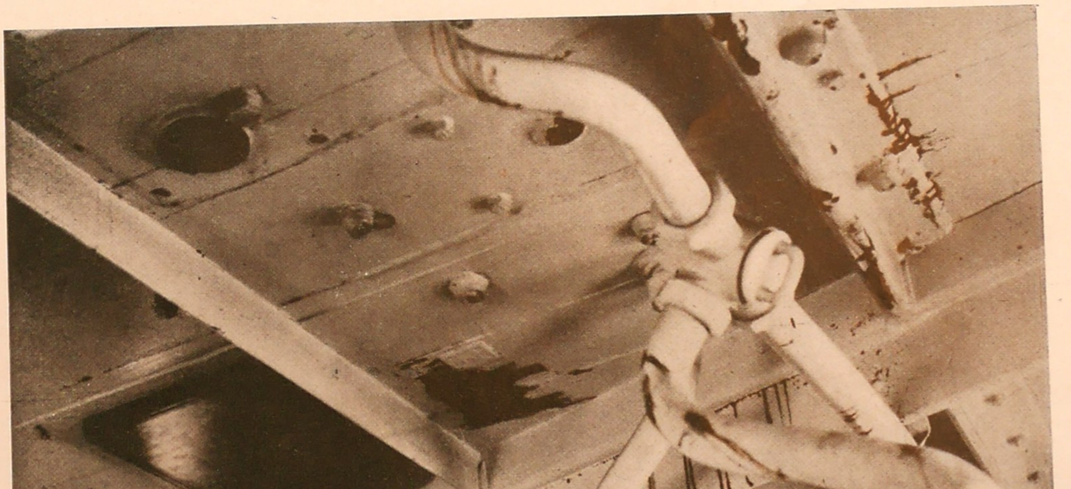
故．東城鉦太郎 作

（東京．水交社 藏）



Z信號三笠の檣頭に輝いて此處に二十年
―今や東鄕提督亡し―

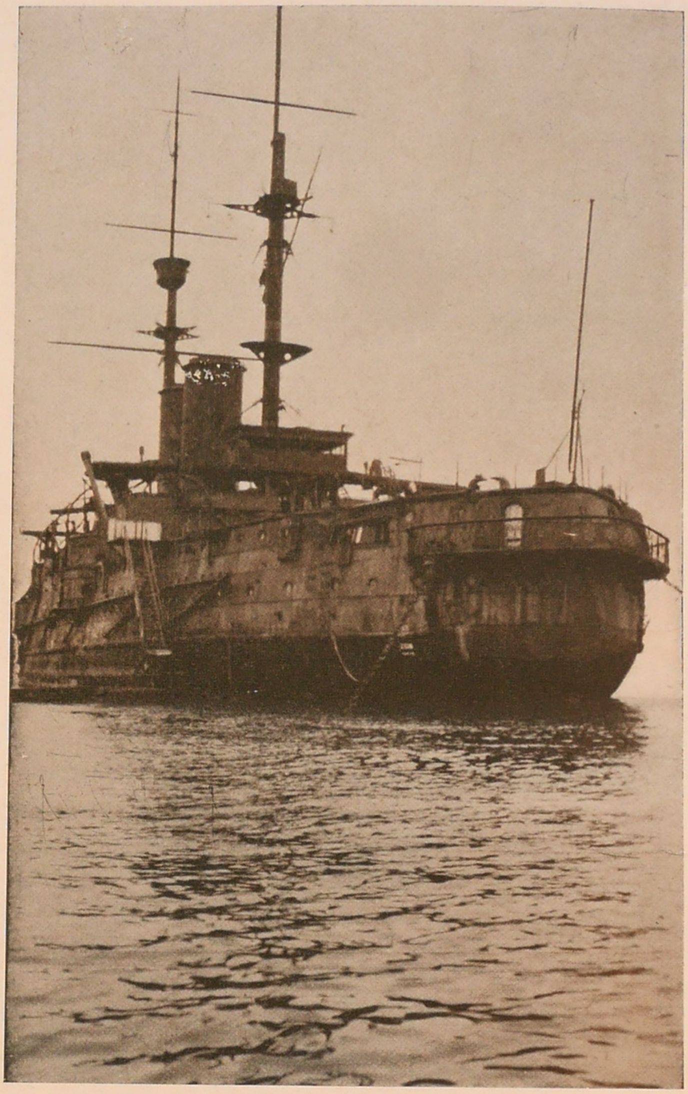
壯烈無比なる日本海々戰が、まさに火蓋を切らんとする瞬間――明治三十八年五月廿七日午後一時五十五分！　東鄕司令長官の座乘する旗艦三笠の前檣桁端高く颯ッ！と緊急信號が飜つた。『皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ』これぞ靑史とこしなへに輝くZ信號である。回顧廿九年！三笠前艦橋のあの瞬間は想ふだに血沸き肉躍るを覺える。今や名提督東鄕逝く、國寶的この巨人の薨去を悼むにつけ、當時を想起して實に感慨無量である。（寫眞はワシントン會議の結果廢艦となつた當時の三笠艦）

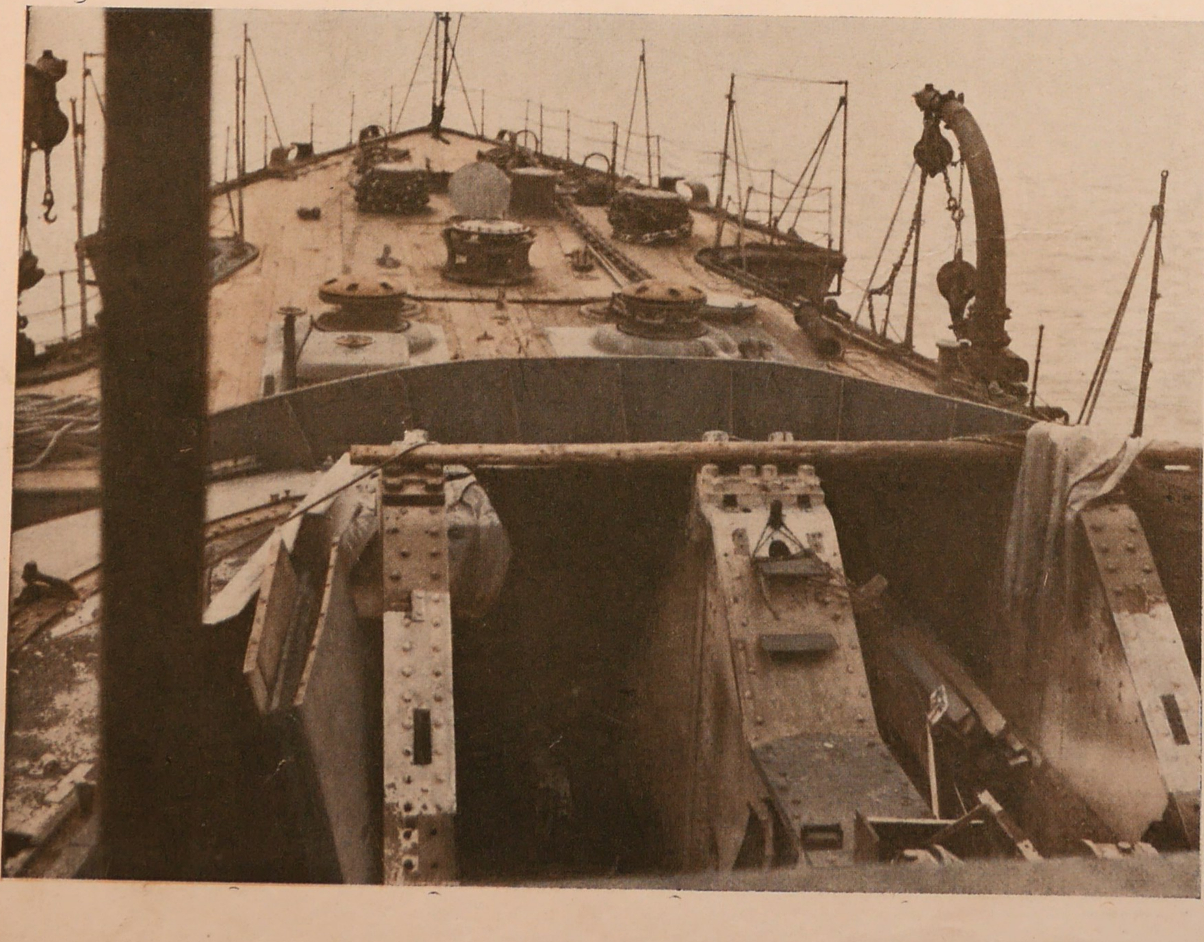


三笠艦上に飜つた不朽のZ信號や『敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直ちに出動、これを撃滅せんとす。本日天候清朗なれども波高し』との千古の名文、又有名なる丁字戰法を想起して我々はおのづからにして故東鄉元帥の偉勳に面接するを覺えるのであるが、此處に皇國の興廢を賭しての決戰に、旗艦とし大功を樹てた三笠の寫眞を掲げて讀者諸君と共に一層深く往時を回想し、故元帥の大勳功を偲ぶことゝした。

× × ×

（右頁上圖）三笠艦の東鄉司令官の居室



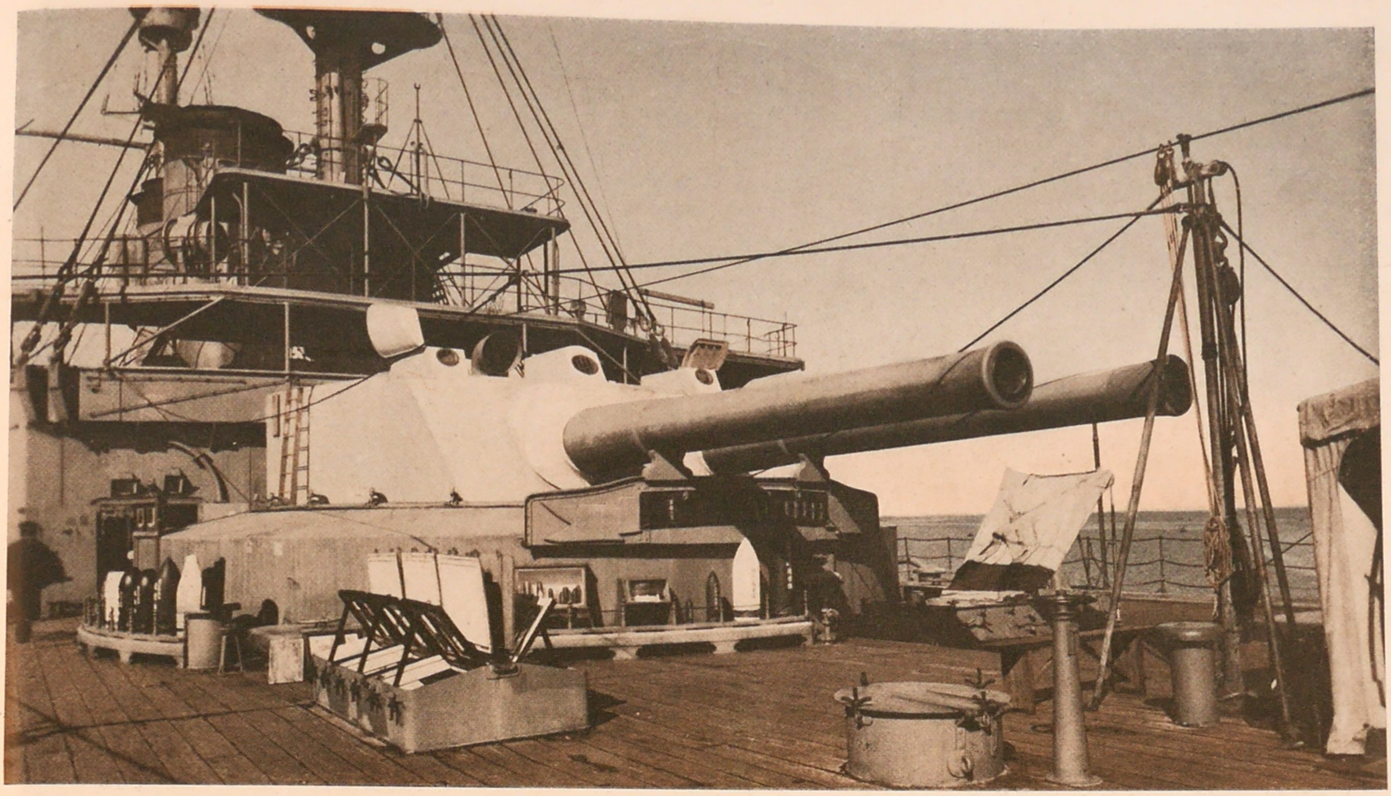


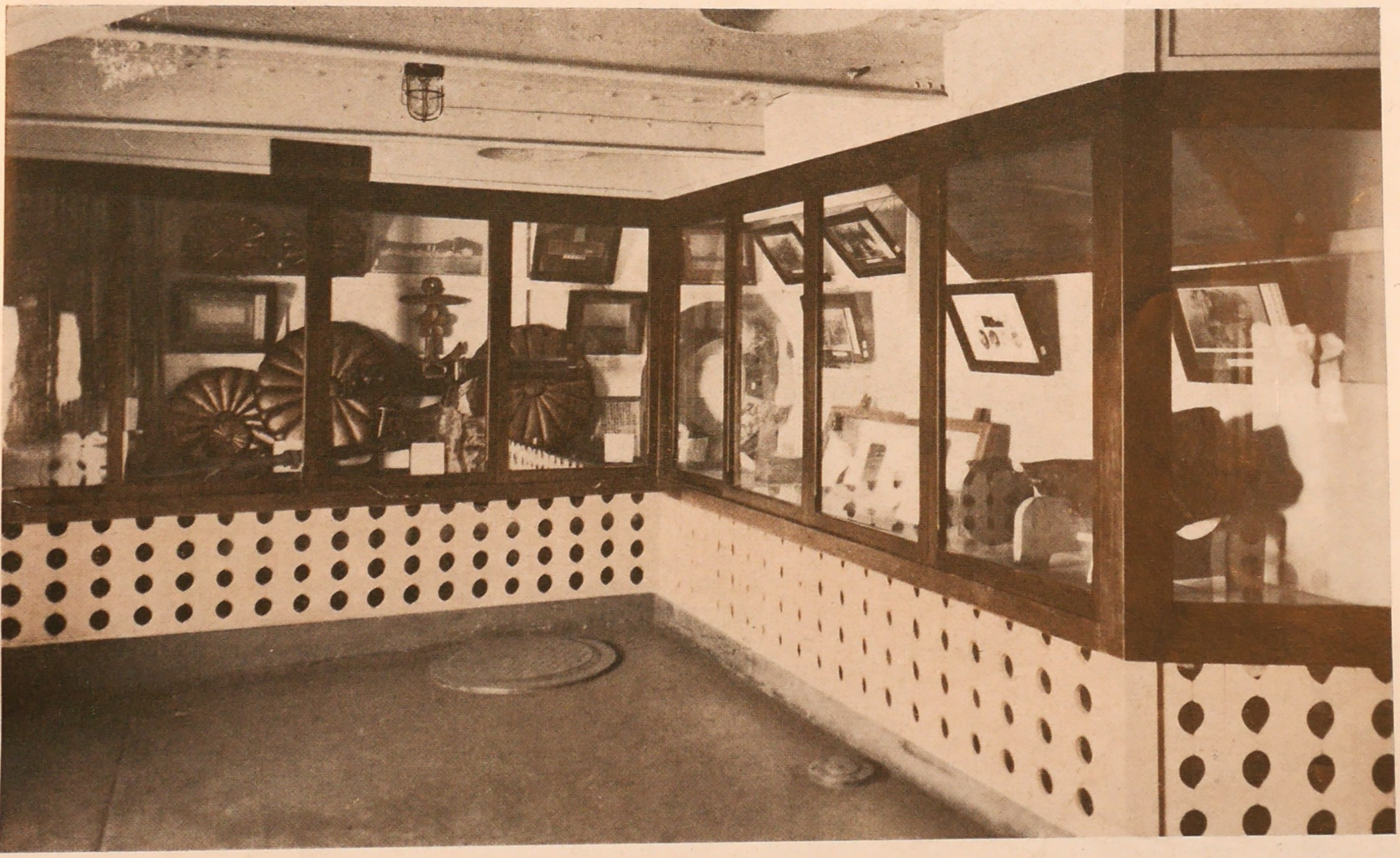
（同　下圖）　敵の十二吋砲彈セルター、デッキに命中し、我が兵十六名を倒して、操舵室の天井より上に貫通し、羅針盤附近の東郷司令官を危く倒さんとした彈片貫通の跡

（左頁上右圖）　廢艦となつて横須賀に繫留されてゐた當時の三笠艦

（同　上左圖）　保存工事が完成して記念艦となつた三笠艦

（同　下　圖）　三笠艦尾の鳥瞰圖——廢艦當時——





未曾有の大功を樹てた軍艦三笠も、ワシントン會議の五五三の比率の犠牲となつて、廢艦の運命となつた。然し光榮あるこの三笠艦を朽ち果てさせることは、國民として到底忍びなかつた。こゝに三笠保存の運動は澎湃として起つた。

大正十五年十一月横須賀海岸にその保存工事は竣工し、畏くも皇太子殿下の行啓を仰ぎ保存記念式が擧げられた。伏見宮博恭王殿下を始め奉り、海陸の將星參列する中に、東郷元帥が海軍大將の禮裝を正して、皇太子殿下の御側近く侍する樣は、不滅の功績を讃ふるにふさわしい光榮の限りであつた

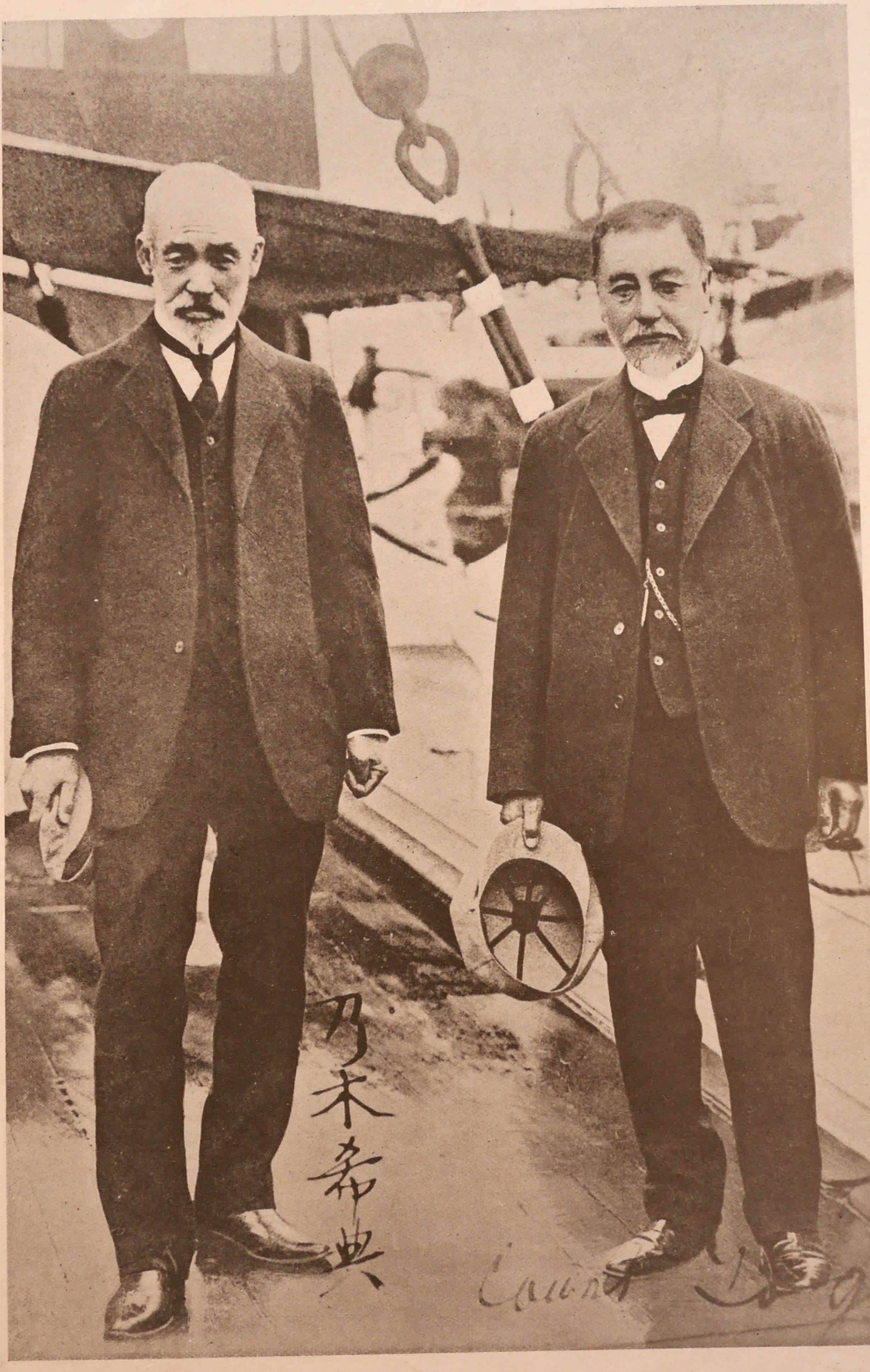
× × ×

（上圖）三笠記念艦の後部甲板と、後部主砲

（下圖）記念艦内の記念品陳列場

大提督の俤を偲ぶ

渡英途上の
東郷、乃木兩將軍



明治四十四年現英國皇帝ジョージ五世陛下の戴冠式に參列のため、東伏見宮依仁親王、同妃兩殿下は、我が天皇、皇后兩陛下の御名代として御渡英遊ばされた。その時東郷大將と、乃木大將は共に殿下に隨行して渡英した。この英帝戴冠式の當時はロンドンには世界各地から名士、名將が雲の如く集まつて來たが、その中でも我が東郷、乃木兩將軍の存在は最も多く世界の注意を喚起し、畏れながら英國皇帝も兩將軍に對しては特に御眷顧あらせられてバッキンガム宮殿の大園遊會の時などは特に兩將軍を御前に召され優渥なる御言葉を賜つたそうである。（寫眞は渡英の途上、加茂丸の甲板に並ばれた兩將軍）

大提督の俤を偲ぶ

聖上陛下の御側近く侍立する

東郷元帥…三笠艦上…

皇國の興廢を賭しての一戰に東郷提督の乘艦として赫々の武勳を樹てた三笠も、ロンドン會議の結果廢艦の運命となつたが國民はこの光榮ある三笠を廢朽させるに忍びず保存してその武勳を永久に偲ぶことゝなり、今三笠は横須賀海岸に、記念艦として往時の雄姿に蘇つてその大功を誇つてゐるこの記念艦の保存記念式（大正十五年十一月十二日）は畏くも聖上陛下（當時攝政宮殿下に在した）親臨の下に行はせられ、東郷元帥は御側近く侍して御説明申上げた。

（寫眞は三笠記念艦上に、陛下の御側近く侍する東郷元帥）

大提督の俤を偲ぶ

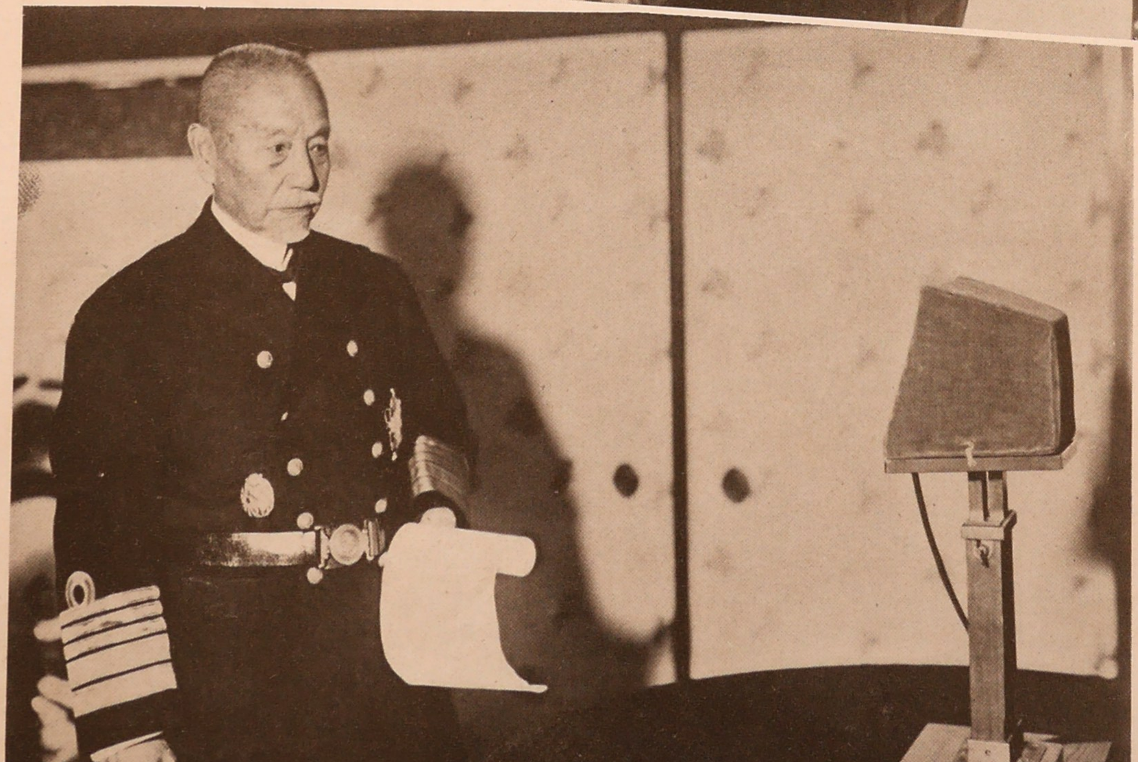
少年東郷會發會式で訓示する東郷元帥

昭和四年の五月廿七日、第廿四回記念日に、少年東郷會の發會式が擧げられた。東郷元帥は水交社に於ける記念式に參列した歸途、日比谷公園の同發會式に臨席し、一場の訓示を與へた

（中圖）少年達に訓示する東郷元帥
（上圖）少年達の『東郷元帥萬歲』に大滿足の東郷元帥

軍人勅諭下賜五十周年記念日の國寶的放送

恰も滿洲上海事變の最中——昭和七年一月四日の軍人勅諭下賜五十周年記念日に當り、元帥は平素の沈默を破つて、麴町の自邸からマイクロフォンを通じて全國民に熱誠溢るゝばかりの所感を放送した。元帥がわざ〳〵マイクロフォンの前に立つてこの初放送を行つた事は、非常時局に當つてのこの記念日に如何に深い感激をもつたかを示すものであつて、實に國寶的ともいふべく、元帥のこの感激は全國民の胸に同じ感激を深く〳〵植えつけたものであつた。（下圖）放送中の元帥



大提督の俤を偲ぶ

若き日の東郷元帥

（上右圖）は明治十二年當時廿二歳の東郷大尉がイギリスに留學中ロンドンで記念撮影したもので、（上左圖）は寫眞の裏の自署である何とモダンな東郷大尉ではないか、然し流石に端麗なその眉宇の中に客氣溢れて、後の元帥東郷のあの毅然、嚴然たる所があらはれてゐる。

濱口首相の招待午餐會に臨席した東郷元帥（下）

これは濱口内閣の時、濱口首相が海軍進級會議のため出席した東郷元帥を始め、各司令官、海軍將星を首相官邸に招待し、午餐會を催した時の寫眞である。元帥が現在の海軍大將連に取圍まれてゐる所は『海軍の父』といはれる事を如實に示してゐる。向つて左から加藤寛治大將、財部彪大將その後は大角岑生大將（現海相）東郷元帥、元帥の後は山本英輔大將、濱口首相、その後安保淸種大將

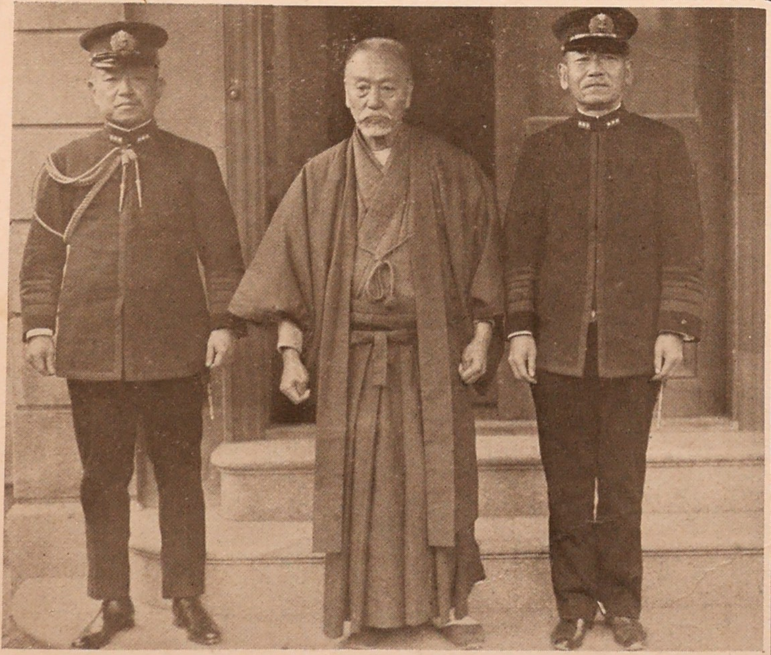
大提督の俤を偲ぶ

東郷さんの好々爺ぶり（上）

あの温顔に笑みをたゝえて、お孫さん達の手をとつて博覧會を見物してゐるところ――大提督東郷も、お孫さん達にとつては一個の優しいお爺さんであつた。

ノビレ少將と元帥

昭和二年三月來朝した北極探檢の勇者ノビレ少將が元帥を訪問した折の記念撮影（下右）

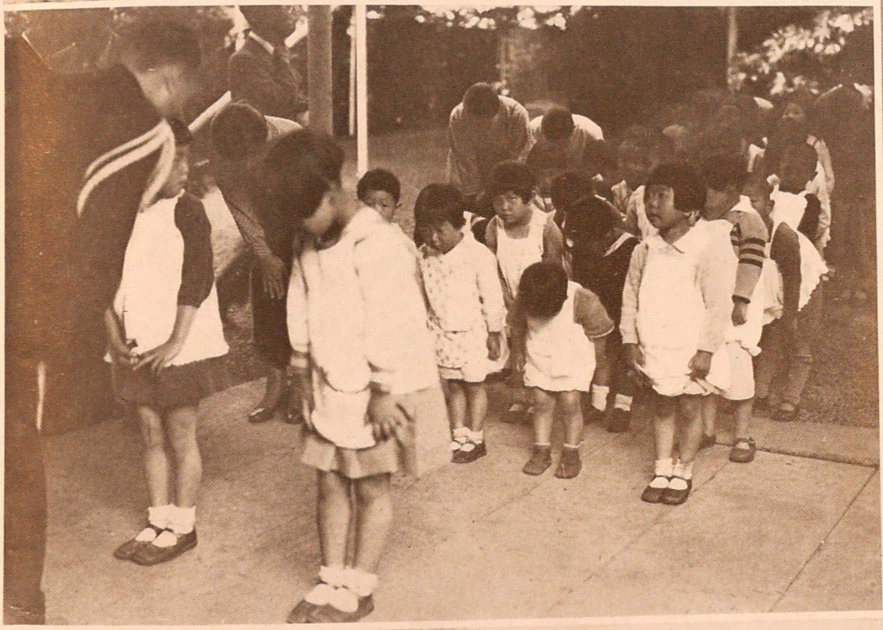


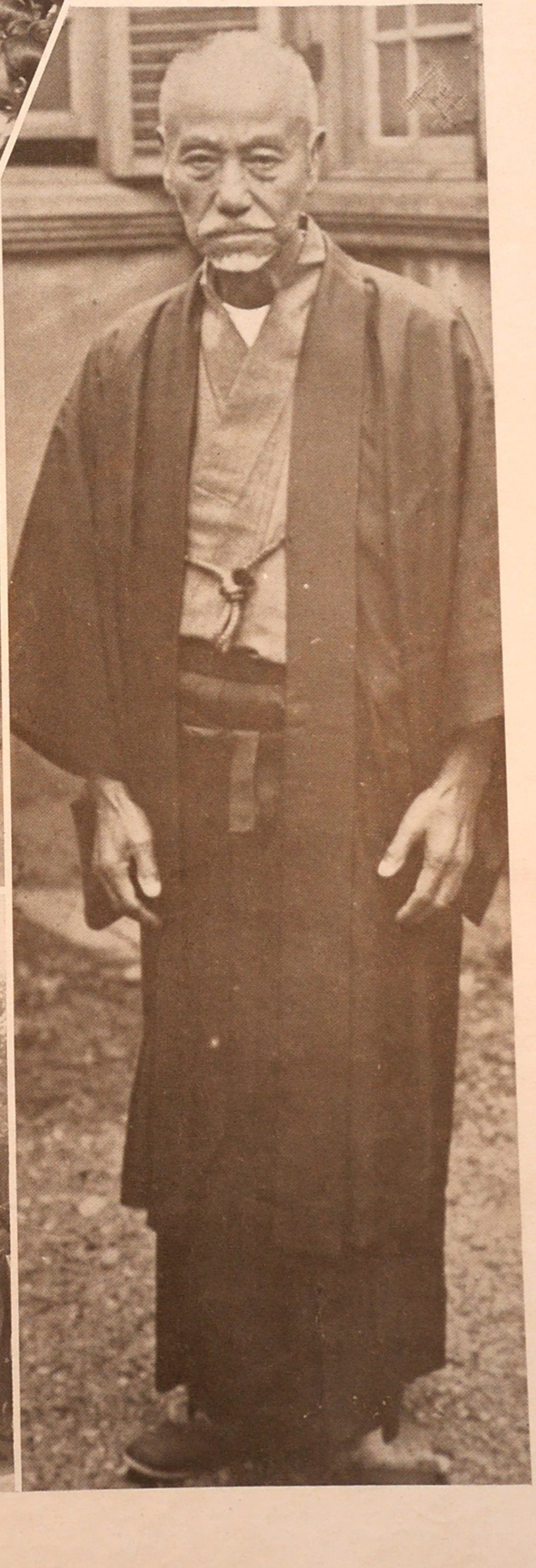
岡田、加藤兩大將と元帥

（下左圖）はロンドン會議の回訓案決定の經過報告に東郷元帥を訪問した岡田大將と加藤大將

元帥病篤しの報に見舞客相継ぐ
東鄕邸

五月廿七日、思ひ出も新たな日本海々戰大勝の海軍記念日に、突知東鄕元帥の病狀の惡化が傳へられるや、同邸には畏き邊りよりの御見舞をはじめとして各宮家の御見舞の他、我が海陸將星その他見舞客引きも切らず、また邸前には快癒を祈つて默禱する人々が夜もすがら踵を接した。





『寫眞說明』

（右頁・右）發病直前の東鄕元帥

（同・左上）海軍記念日當日、元帥に代つて、小學生の祝賀を受ける愛孫百子さん

（同・左中）東鄕邸を見舞つた上六幼稚園園兒

（同・左下）靖國神社に參拜、元帥の平癒祈願をこめる上六小學校生

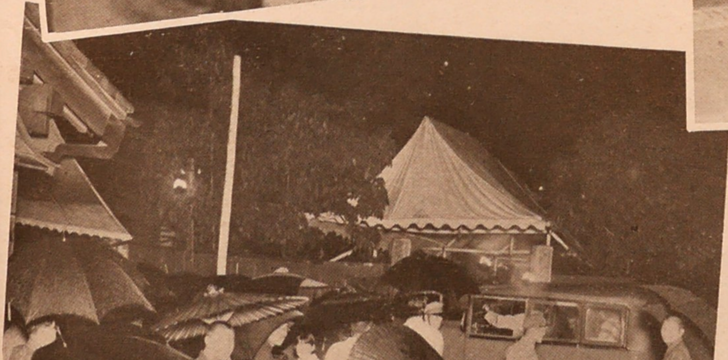
×　×

（左頁）は東鄕邸を見舞つた顯官將星で、（右上）齋藤首相、（右下）は廣田外相、（中上）湯淺宮相、（中下）林陸相、（左）は、畏き邊りより御差遣の鈴木侍從長、（下圖）は米國大使ー應對するは加藤寬治大將

多年の勳功を嘉せられ侯爵を授けらる

畏きあたりでは、東郷元帥の病篤き趣きを聴し召され、同元帥が多年の顯著なる勳功を嘉せられ、五月廿九日侯爵に陞爵の御沙汰があつた。この有難い聖恩は同日午後零時半宮内省から電話で東郷邸に通知されたので、光榮に感激した元帥邸では直ちに嗣子彪氏が正装に威儀を正して自動車で宮内省に出頭、御沙汰書を拜受して同一時十分歸邸、直ちに令弟實中佐と打ち揃つて、西川侍醫立會の上元帥の枕頭に進み、この恩命を傳へた。すると今まで眼をとぢてゐた元帥は、眼を大きく開き、羽織と、袴を持ち出させてこれを夜具の上にかけ、感激の涙に咽んだといふ。

（上右圖）爵記を拜受して宮中から退下した嗣子彪氏（向つて左）と實中佐（右）



（左上圖）元帥病篤しの報に急遽呉から歸京した令息實中佐（潜水母艦長鯨の副長）が父元帥の容體を發表するところ、

（左下圖）時雨降つて一入の憂愁にとざされた五月廿八日夜の元帥邸前

擧國一致の祈願も甲斐なく元帥遂に薨去さる

我等が無限の景慕を捧げし東鄕元帥が、痼疾の喉頭癌と膀胱結石の惡化によつて病篤しとの報傳はるや、我が國民は擧げて元帥回生の祈願をこめたのであつたが、その禱りも空しく、又現代醫學のあらゆる手だて遺漏なき看護も効なく、五月三十日午前七時遂に薨去せられた。

（上圖）悲痛なる面持で元帥の薨去を發表する小笠原長生子

（下左）元帥の薨去發表――元帥邸の門

（右下）哀愁にとざゝれた東鄕邸――元帥の病室を望む――

巨星地に殞ちて 弔問客繁き 東郷邸

『わが海軍の父』を亡つた悲しみの日、東郷邸は弔問客繁く跡を絶たなかつた。まづ加藤大將、山本大將、黒井大將、谷口大將、柳川次官等陸海將星踵をついで弔問に馳けつけ、午前八時には齋藤首相、堀切翰長が、フロック姿で玄關に吸ひ込まれる。伏見軍令部總長宮殿下御使新島副官、加藤軍令部次長、鹽澤航空本部長、林博太郎伯と相次ぐ弔問者の中に、午前九時、かつての戰友瓜生大將が、不自由な體を杖にすがりながら令息にたすけられて訣別に來たのと、故島村速雄大將未亡人が松葉杖にすがりながら令息夫人にたすけられて弔辭を述べる姿は痛々しく人々の涙をそゝつた。時が經るにしたがつて、弔客は益々繁く、元帥邸裏の上六番町の小學校の校長が敎職員と生徒代表を率ゐてお悔みに來る。海兵團が整列して敬禮する、……次から次へと弔問者は跡を絶たず、今更らながら故元帥の德が偲ばれた。

× ×

東郷元帥薨去の趣き天聽に達するや、天皇陛下にはいたく御哀惜あらせられ從一位宣下の御沙汰を賜り更に御弔問使として久松侍從を差遣はされ御弔問せしめられた。また皇后陛下には大金事務官を御使として皇太后陛下には西邑事務官を同じく遣はされて御鄭重に御弔問あらせられた。また伏見宮博義王殿下には同日午後五時親しく靈前に御弔問遊ばされた外北白川宮、伏見宮山階宮各宮家、李鍵公、李鍝公兩殿下にも御使を差遣はされ故元帥生前の武勳は一入光榮にかゞやいた。

【寫眞說明】

（右頁上圖）東鄕邸弔問の久松侍從
（同下右）戰友瓜生大將の弔問
（同下左）弔旗を揭げた邸前の家々

× ×

（左頁上圖）親しく東鄕邸を御弔問遊ばされた伏見宮博義王殿下
（同中圖）故元帥の薨去に悲しみのお孫さん達
（同下右）純情胸をうつ少年東鄕會の少年の弔辭
（同下中）立正學園女生徒の弔問
（同下左）元帥發病以來薨去まで看護に盡した看護婦福岡松惠さん

訣別に咽ぶ 靈前祭

薨去第二夜を迎へた東郷元帥邸では五月卅一日午後六時から悲しみの中にも嚴肅な槽入りの式（納棺式）を行つた。歸らぬ元帥の冷い遺骸は、令嗣彪氏、次男實氏以下近親の人々並に有馬大將、加藤大將、小笠原子等の手によつて靜かに槽の中に移され、更に大角海相、谷口大將等元帥新舊副官の手に支へられて正寢の間の齋壇に安置された。かくて七時半から芝八幡宮の吉田光長氏司祭の下に靈前祭が行はれ、彪氏始め列席者は順々に玉串を捧げ、八時半に滑りなく終つた。（下圖）はその靈前祭で、左より嗣子彪氏夫妻、次男實氏夫妻

故東郷元帥の勲功を思召され優渥なる誄を賜ふ

畏きあたりでは三朝に仕へて邦家の柱石となりし故東郷元帥の勳功を思召され、六月四日午前十時、同邸へ勅使甘露寺侍從を差遣はされ優渥なる誄を賜つた。

この朝、午前十時勅使甘露寺侍從は、御誄と眞榊、神饌幣物を捧じて參着、直ちに右手の間に入つて休息せられたやがて勅使は坊城式部官の御案内で、正寢の間に進み、天皇陛下から賜つた御誄を捧讀した後、宮中から持參した玉串を奉奠して拜禮、再び坊城式部官に導かれて退下した。ついで同十時十五分皇后陛下の御使黒田事務官、同十時三十分皇太后陛下の御使濟閑寺事務官がそれ〳〵參着眞榊を賜つた上玉串を奠じた。かくて喪主彪氏以下近親、參列員拜禮、午前十一時嚴かなうちに式を終つた。

(右頁上圖)はその賜誄の儀

故元帥の靈前近く市民感激の礼拝

東郷家では、六月一日より特に故元帥の德を慕ふ一般民衆の禮拜を差許したが、弔問する人は正寢の間へ通り靈柩近く、心からの默禱を捧げてその神々しさに胸をうたれた。弔問者には陸海軍の將星もあり、顯官もあれば、幼い子の手を引いた婦人もあり、また杖にすがる老人、中學生、女學生サラリーマン、店員……あらゆる階級の人々が間近に見る元帥の靈柩に感激して涙を流さんばかりであつた。

(左上)靈前に禮拜する一般市民(左中)同じく兒童の禮拜(左下)混雜する元帥邸門前

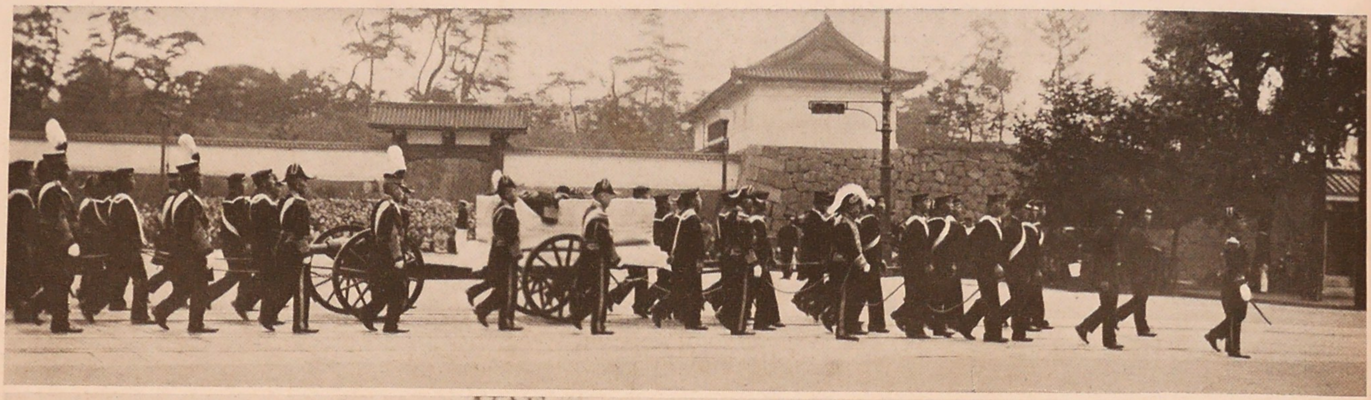
× ×

(右下圖)東郷元帥邸を弔問した英國支那艦隊司令官ドレーヤー大將

護國の聖將を永久におくる 國葬の盛儀

護國の大偉人、われ等が東郷元帥を永久におくる國葬の儀は、六月五日全世界の哀悼裡に悲しくも盛大に執り行はれた。

この日早朝、元帥邸では最後の儀式柩前祭が哀愁の中にも嚴肅に執り行はれ、午前八時卅分、故元帥の靈柩車は、卅年住みなれた麹町の自邸に永遠の別れを告げて日比谷の葬場へ向つた。この時陸海軍々樂隊は『命を捨てゝ』を奏すれば、各儀仗兵は『吹なす笛』を一齊に吹奏、品川沖の軍艦『伊勢』からは殷々たる弔砲が發せられた。嚴肅な葬列――先驅は騎馬の井上、細谷兩警部、次に內藤中尉の指揮する五十名の海軍々樂隊は『葬送曲』を奏でつゝ進む、次いで儀仗兵、續いて菱田、瀧兩司祭、衣冠姿の吉田副司祭長、加藤司祭長、銘旗、林少佐の捧持する元帥刀、奥大佐以下の捧げる勳章が進む。棺側には左側に德富猪一郎、清川海軍中將、谷口海軍大將、奈良陸軍大將、竹下海軍大將、黑川海軍大將、眞崎陸軍大將、山本海軍大將、平沼樞府副議長、右側に吉村海軍法務官、飯田海軍中將、安保海軍大將、岡田海軍大將、町田陸軍大將、末次海軍大將、渡邊陸軍大將、河合樞密顧問官、大角海相の顯官將星棺側を護り、黯々と行く、その後に喪主彪氏が素服衣冠姿の身を喪杖にさゝへ、力なき藁沓の足を一歩々々踏みしめる。その後から親族の一團、所定諸員、小笠原子加藤主治醫、西川侍醫、國務大臣代表後藤農相など卅人の特別緣故者、陸軍代表、海軍代表計百十人の正裝の一團、續いて有馬葬儀委員長、堀切同副委員長以下各委員、儀仗兵指揮官南次郎大將が乘馬で從ふ、儀仗兵列の最後に近衞騎兵聯隊二小隊が隊伍を整へて續き、その後に英、米、佛、伊各海軍將校二名、水兵四十名が武裝も勇ましく續く蜿蜒十八町に及ぶ――沿道に堵列する六十萬餘の市民の淚の中を順次日比谷へ進み、午前九時四十分靈車は日比谷公園葬儀場に入つた。



【寫眞說明】

（右頁）故元帥の靈柩

（左頁上圖）半藏門を通過する靈柩

（左頁中圖）元帥刀を先頭に故元帥の勳章を捧持して行進

（左頁下圖）葬場へ進む靈柩

十四分靈車は日比谷公園葬儀場に入つた。

護國の英靈を送る
日比谷原頭 空前の盛儀

海軍々樂隊の『葬送曲』の樂の音に先導されて靈車肅々として葬場正門を入れば、それより先、葬場に御着の閑院元帥宮、伏見元帥宮、同妃兩殿下、同若宮、久邇宮同妃兩殿下ほか皇族御十三方、在京外國使臣、淸浦伯、若槻男、倉富男はじめ文武百官、民間諸名士等三千の參列者一同一齊に起立して候迎した。靈車は徐ろに正面齋場に入り、かくて葬場の儀は午前十時より開始された。この時參謀本部前庭に整列した野砲兵一個中隊四門の砲車は一齊に火蓋を切り十九發の弔砲を發射する衣冠單に愁ひをつゝんだ加藤司祭長祭壇に進んで祭詞を白せば、滿場寂として悲愁の感一入身に迫る。かくて勅使德大寺侍從の玉串奉奠についで皇后宮、皇太后宮兩陛下御使玉串を捧げ、御參列の各皇族殿下の御直拜、秩父宮はじめ御七宮の御代拜、終つて喪主近親者、外國使臣、齋藤首相以下參列諸員の拜禮あり、午前十一時式を終へた。

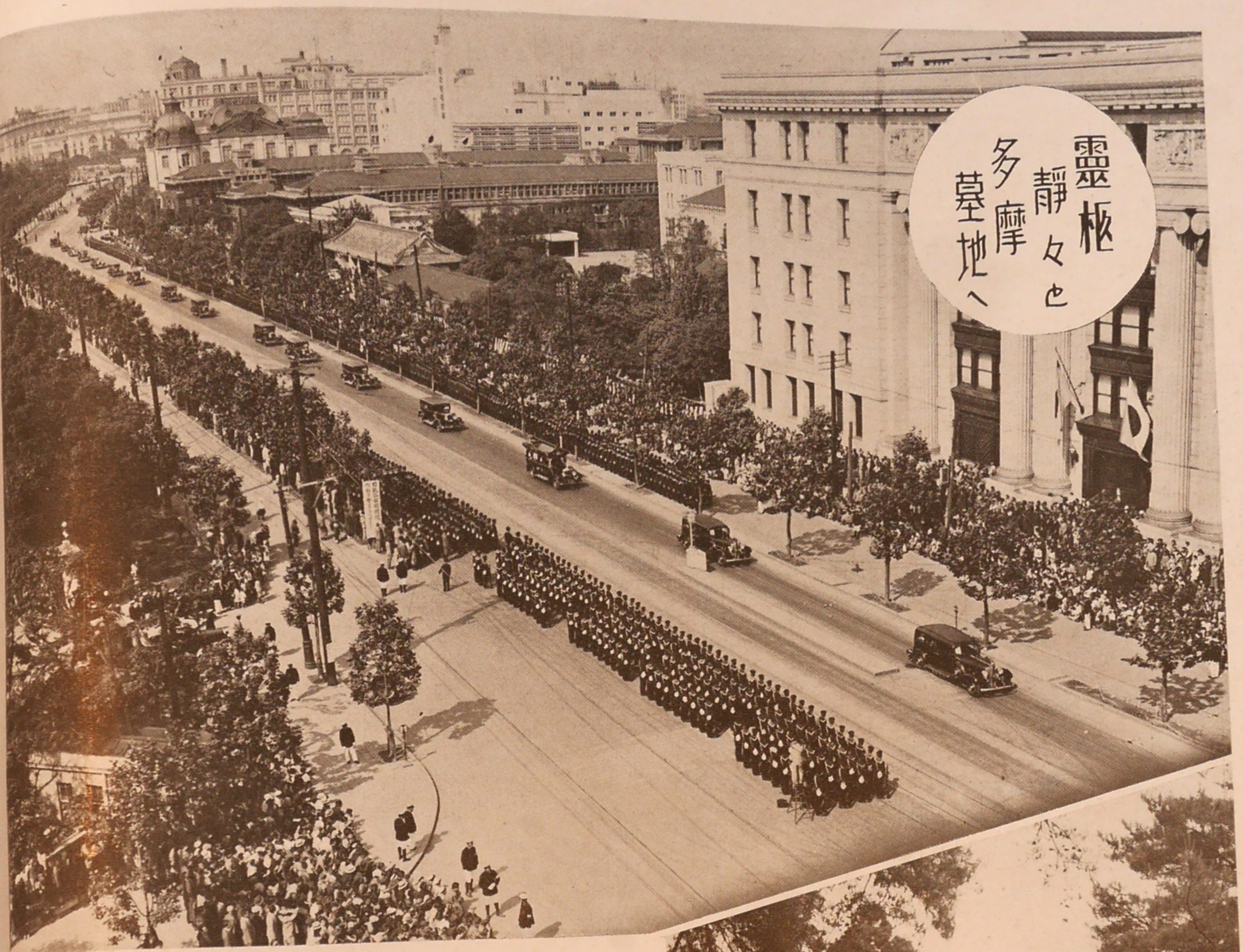
(上圖)喪主彪氏の拜禮
(下右)葬儀に參列の齋藤首相
(下左)葬場に於ける喪主彪氏夫人並びに令孫達

午後零時半から一般の拜禮が許された。朝早くから日比谷公園の周圍につめかけてゐた大群集は、ドツと怒濤の樣に正門に殺到して、我れ勝ちに故元帥の靈前に額かうと凄じい勢ひでなだれ込んだ。靈前で最敬禮の出來たのは僅かに二三十人の人達だけで、後は、後から〱とつめよせる人の爲めにお辭儀どころか、身動きも出來ない有樣であつた。この市民禮拜の嵐こそは、元帥生前の偉德のあらはれであつて、この一般禮拜者の數は無慮十萬と算せられた。

（上圖）雪崩の樣に齋場に繰込む一般禮拜者

（下圖）沿道を埋めた大群集――葬列通過の跡の櫻田門から三宅坂附近

靈柩靜々と多摩墓地へ



日比谷葬場に於ける盛大なる盛儀を了へて靈柩は午後二時五十分葬場を出發、英靈永へに鎭ります多摩墓地へ向つた。喪主彪氏以下遺族や司祭長加藤寛治大將、大角海相ほか十五名の將星、十七名の諸員にまもられて、沿道市民の歔欷の中を四時十五分しづ〳〵と墓地に到着した。

（上圖）日比谷葬場より、多摩墓地へ向ふ葬列

（下右圖）靈柩車、轍の音も悲しく多摩墓地に到着

（下左圖）墓守をする往年の軍艦『三笠』の勇士達

多摩の幽境に英靈永へに鎭まる

大東郷の英靈永へに鎭まる多摩幽境の墓所に到着した靈車は直ちに設けの幔門内に引入れられ、喪主以下家族、近親者並に有馬、堀切正副委員長、加藤、吉田正副司祭長以下諸員の、立並ぶ裡に靈柩は遠藤海軍少佐の引率する純白の布衣をつけた日本橋鄕軍十五名によつて恭しく白木の床子に移された。次いで靈柩は樂人の奏する哀調の樂の音蕭々たる裡に石槨に降された

やがて幔門は再び開かれて喪主、家族近親等は墓前に進んでお別れの土をかけ、五時廿分幔門はまた閉された。かくて諸員は墓前の幄舍に參進、奏樂裡に神饌が捧げられ、喪主彪氏は靜かに進み出て切々胸をつく斂葬詞を述べ、次いで喪主より順次墓前に額づき同七時式を終へた。

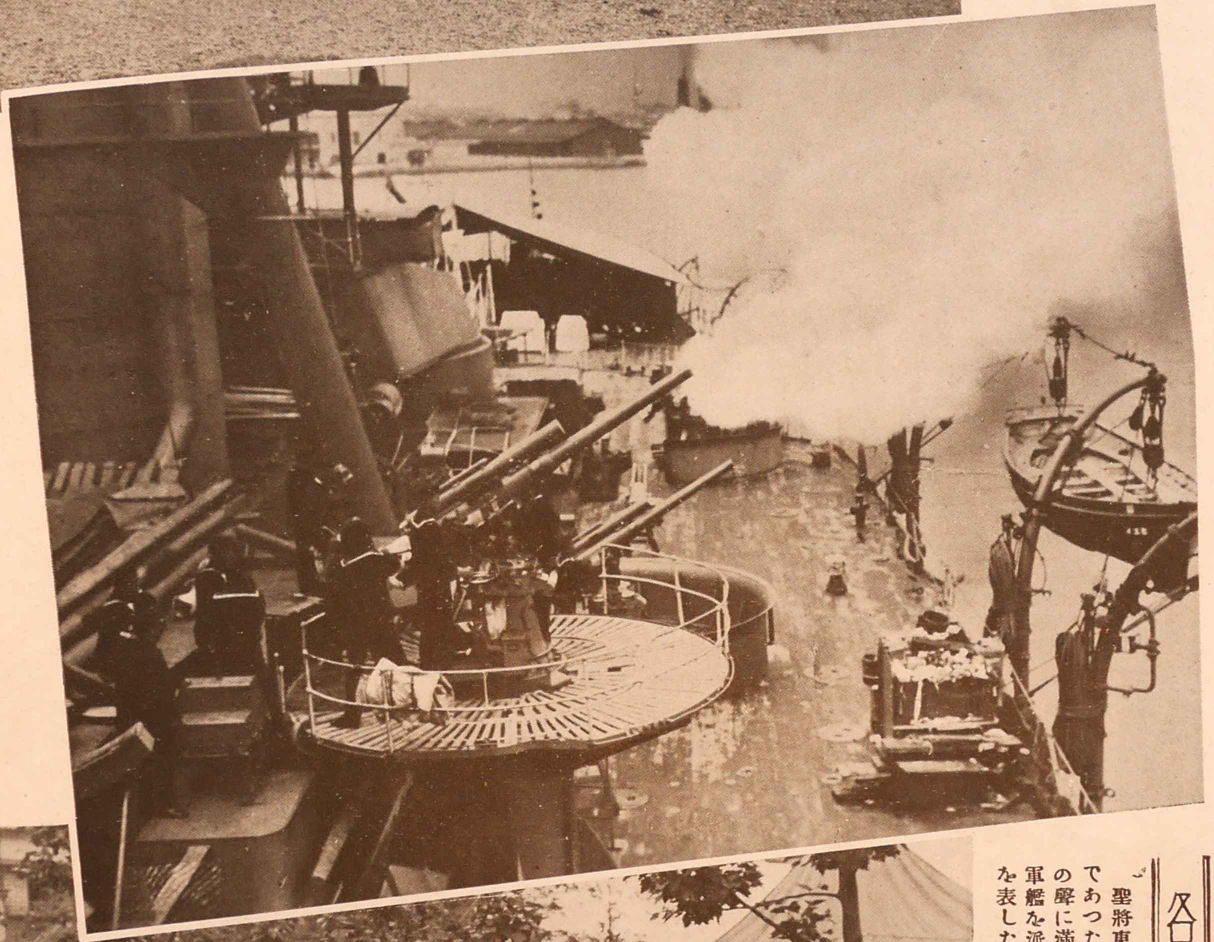
(上圖)英靈永へに眠る墓所

(下右圖)司祭長加藤寛治大將

(下左圖)墓所の儀に參列の喪主彪氏以下遺族並に將星

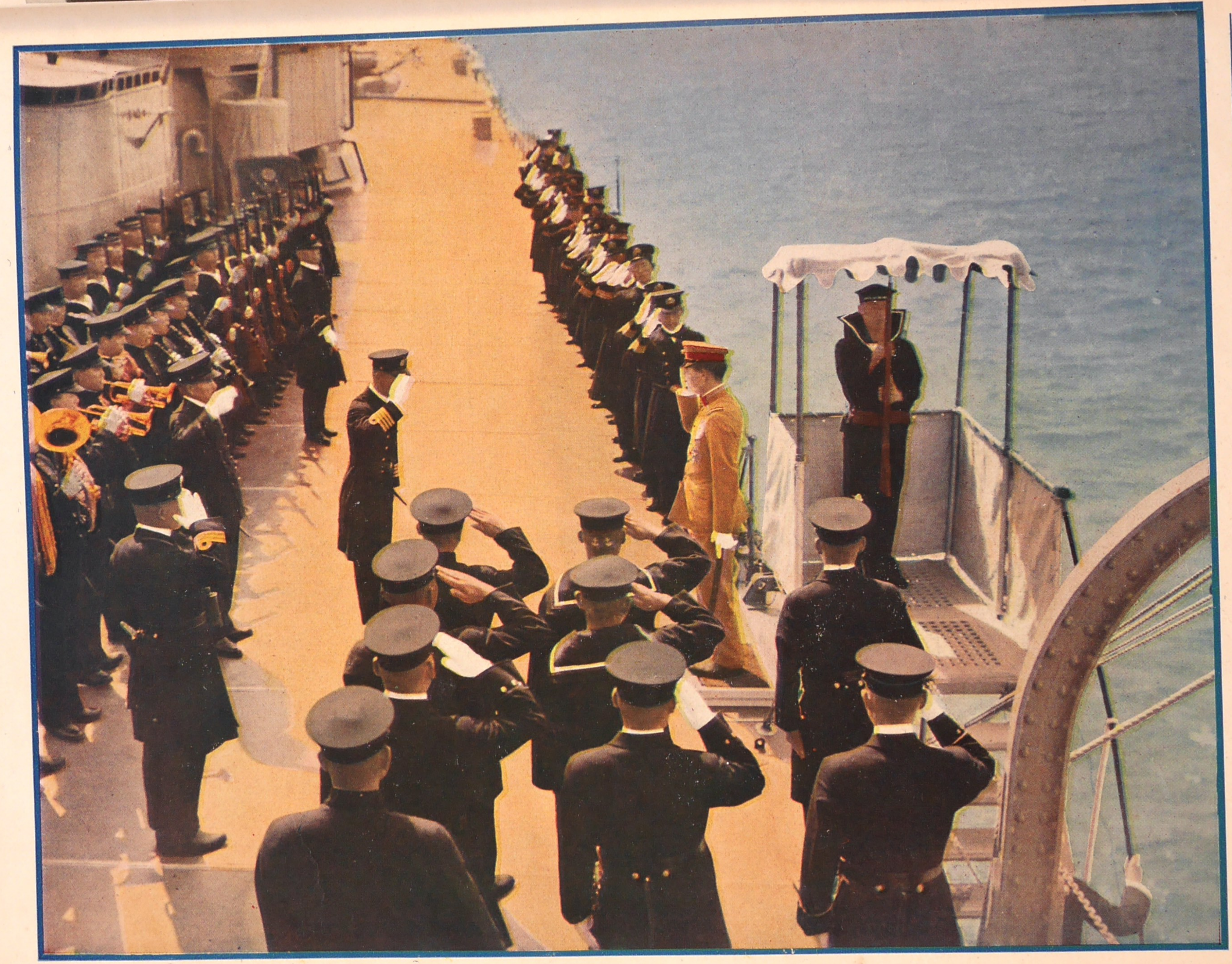
陸海軍の弔礼砲

我が海軍の父東鄕元帥の靈柩が麹町の自邸發引の時——八時三十分、品川沖に碇泊してゐた軍艦伊勢から殷々たる十九發の砲聲が響き渡つた。これこそ我が海軍の父を葬送する熱誠こめた帝國海軍の涙の弔禮砲である。同時に横濱沖に投錨した軍艦比叡、英、米、佛の儀禮艦から打ち出す弔禮砲が轟き渡つて東京灣を掩うた。一方陸軍の弔砲發射部隊は、坂本大尉指揮の下に三宅坂の參謀本部に四門の砲列を布き、葬場からの信號を合圖に十九發の弔砲を放つた。轟音空に響き、紅蓮の炎を吹いて、この悲しみを天に傳ふるが如くであつた。（上圖）陸軍の弔砲（下圖）横濱在泊の軍艦比叡の弔砲



各國儀仗兵を派遣

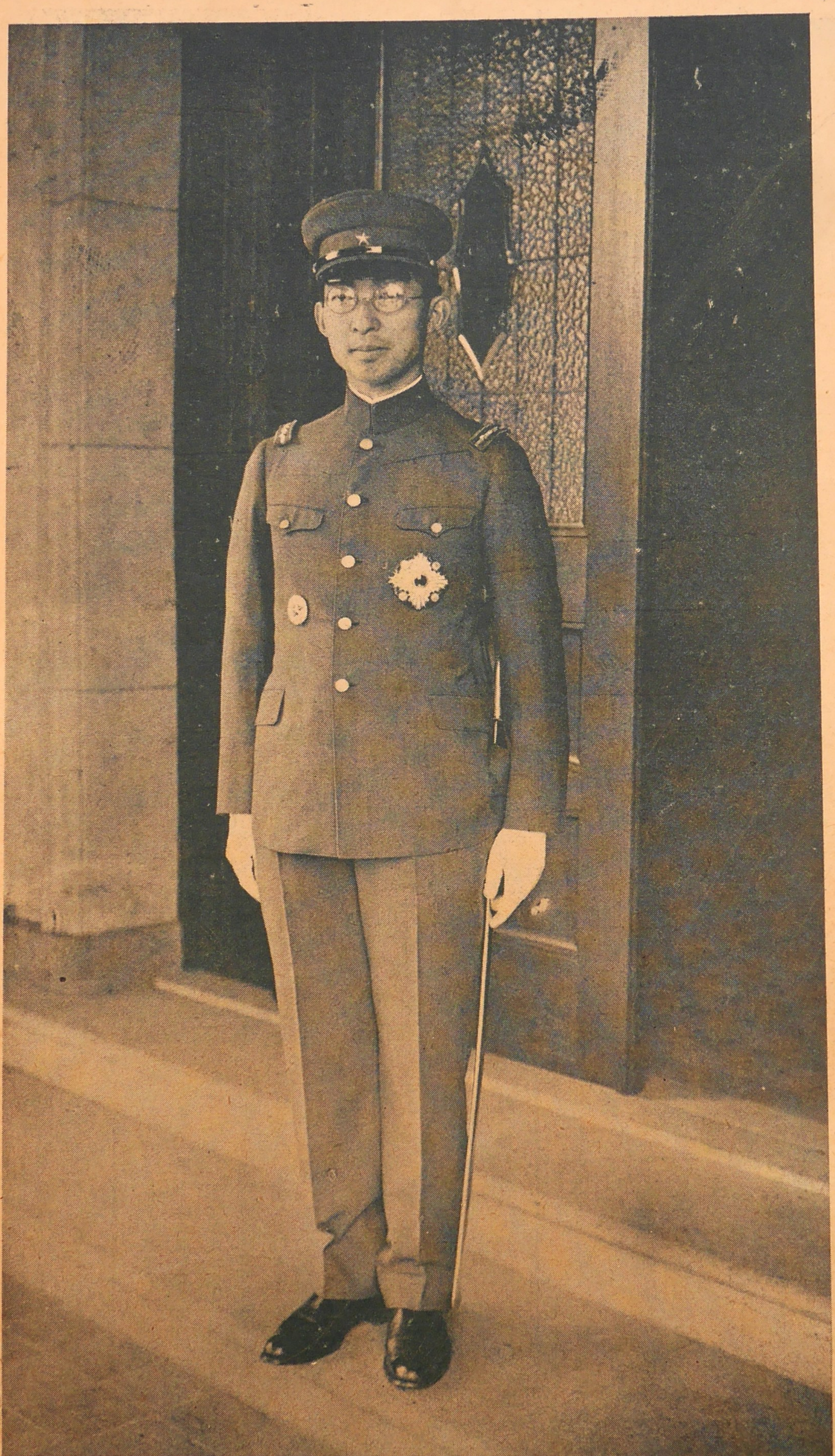
聖將東鄕は、ひとり日本の東鄕たるのみならず世界の東鄕であつた。さればその薨去の報傳はるや、世界は擧げて痛惜の聲に滿ちた。そして、英、米、佛、伊、日華の各國は各々軍艦を派し、儀仗兵をおくつて葬儀に參列せしめ心から哀悼を表した。（下圖）は葬儀に參列のイギリス儀仗兵



秩父御名代宮殿下御渡滿遊ばさる

—御召艦上の殿下—

畏き御重任を帶びさせ給ひ、友邦滿洲國を御訪問遊ばされる秩父御名代宮殿下には、別掲の如く六月二日夕刻帝都を御出發御西下あらせられ、三日午後三時下關驛御着、同三時十分御召艦足柄に御乘艦遊ばされた。かくて殿下には乘組全員甲板上に整立、海軍軍樂隊の君が代奏樂裡に御居室に當てられた艦長公室に入らせられ、やがて關門兩市民の海上をゆるがす萬歳の奉唱裡に午後五時拔錨、一路大連に向け御出港遊ばされた。（寫眞は御召艦上の御名代宮殿下）



滿洲國帝政御慶祝の爲め御名代として秩父宮殿下を御差遣遊ばさる

友邦滿洲帝國の帝政實施につき、畏くも天皇陛下には、康德皇帝陛下に對して深厚なる御慶祝の意を表せられるため、御名代として秩父宮雍仁親王殿下を御差遣遊ばされた。御名代宮殿下には、六月二日夜帝都を御出發、一路西下あらせられ、門司にて軍艦足柄に御搭乘、六日新京御著、七日午前滿洲國皇帝と意義深き御會見の上、御名代としての御使命、御親書並皇帝陛下へ大勳位菊花大綬章、皇后陛下へ勳一等寶冠章を捧呈――を果させ給ひ、更に各方面へお成り、台臨遊ばされ、十三日に新京御出發御歸朝の御豫定である。――本誌が讀者の手に渡るのは殿下の御歸朝遊ばされる頃と思ふ――この御名代宮の御差遣によつて、脣齒輔車の關係にある日滿の關係は更らに一段の濃やかさを加ふるを想ひ、まことに恐懼感激に堪えない所である。（寫眞は晴の御首途を前に宮中賢所に御渡滿御奉告の秩父宮殿下）

光榮の御名代宮隨員一同拜謁仰付らる

秩父御名代宮殿下に御伴申上げて渡滿する光榮の隨員――林式部長官、植田參謀次長等十四名――は、五月廿八日午前十時宮中に參內、鳳凰の間に於て天皇陛下に拜謁仰付けられ、優渥なる御言葉を拜し、感激して御前を退下、續いて午前十一時過ぎ、賢所を參拜して退下した。

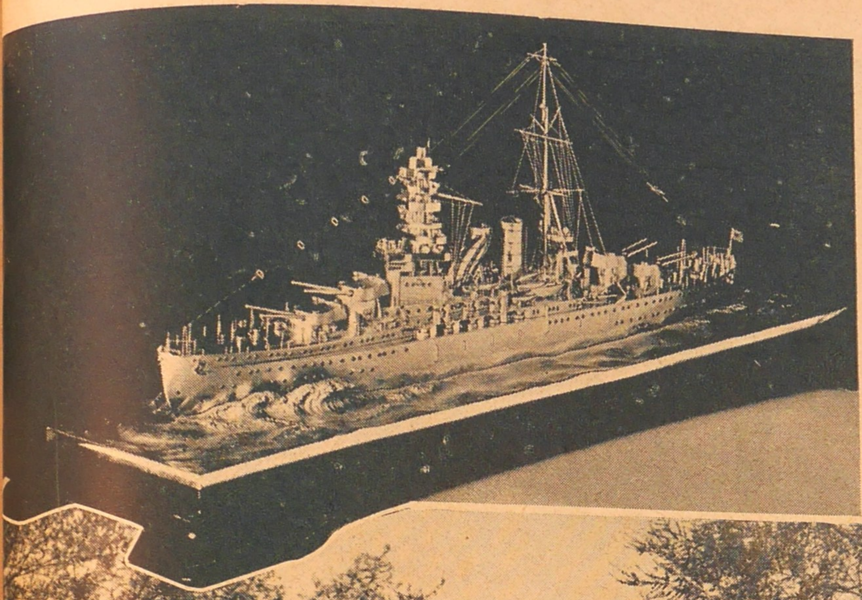
（寫眞は拜謁仰付けられた隨員一同）

御名代宮殿下帝都を御出發

尊く重き御使命を荷はせられた秩父御名代宮殿下には、六月二日午後六時赤坂表町御殿を御出門、東京驛に向はせられ、同六時十分御著、牡丹の間で御少憩の後、御見送りの閑院、梨本兩元帥宮、伏見宮博義王、東久邇宮妃、北白川宮、竹田宮、同妃、李鍝公各殿下と御對面、御別辭を交はさせられ、齋藤首相、一木樞府議長以下奉送の一同に謁を賜ひ、やがて堀木新橋運輸事務所長、堀尾東京驛長の御先導で第四ホームに御歩を進められ、多數奉送者に擧手の禮を賜ひつゝ特別列車の展望車に御乘車、林式部長官以下各隨員も夫々乘車、定刻六時四十分いよ〳〵帝都を御後に下關に向け御鹿島立ち遊ばされた。

（上圖）東京驛御出發の秩父御名代宮殿下――御見送り遊ばされるは、向って右から秩父宮妃、閑院元帥宮、伏見博義王、梨本元帥宮東久邇宮妃、北白川宮、竹田宮、同妃、李鍝公各殿下
（下圖）奉送の男女青年團

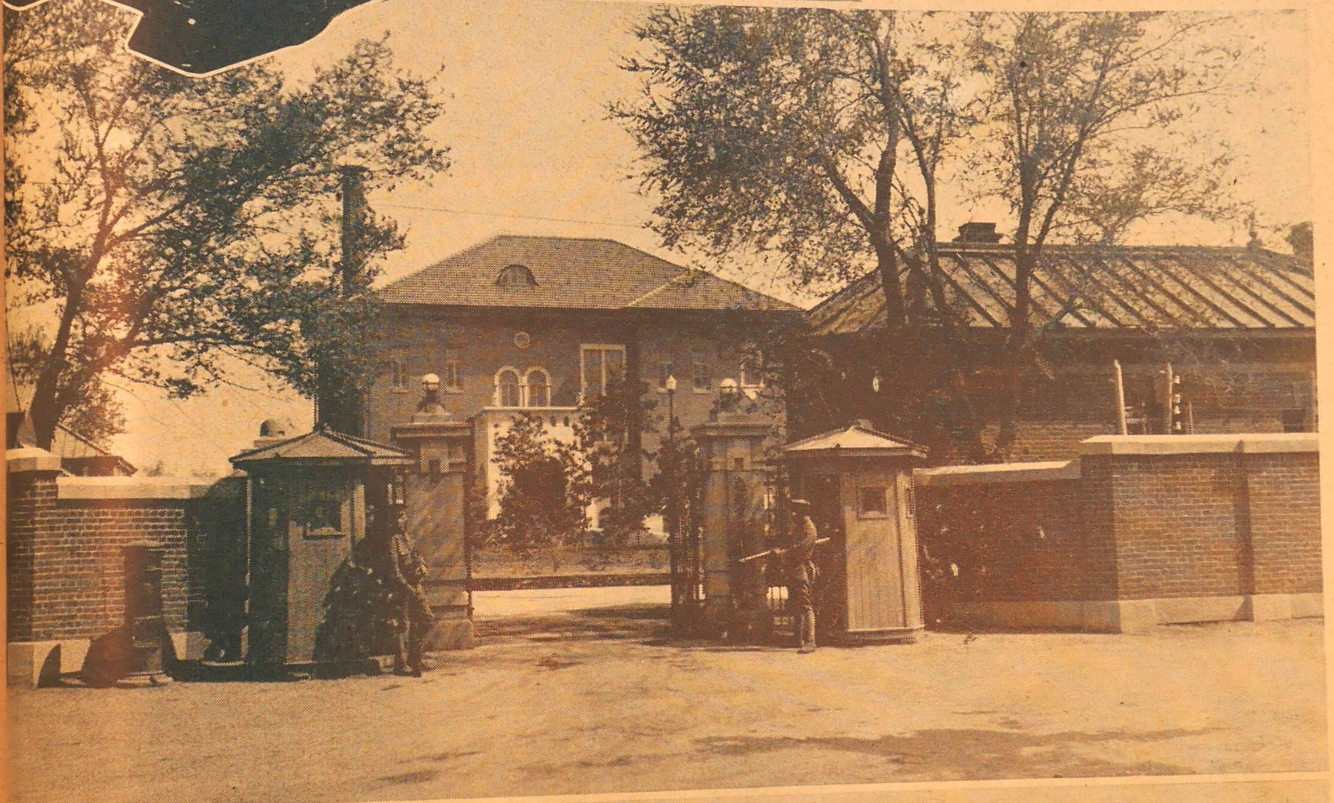
御名代宮殿下の御土産 軍艦「長門」の模型



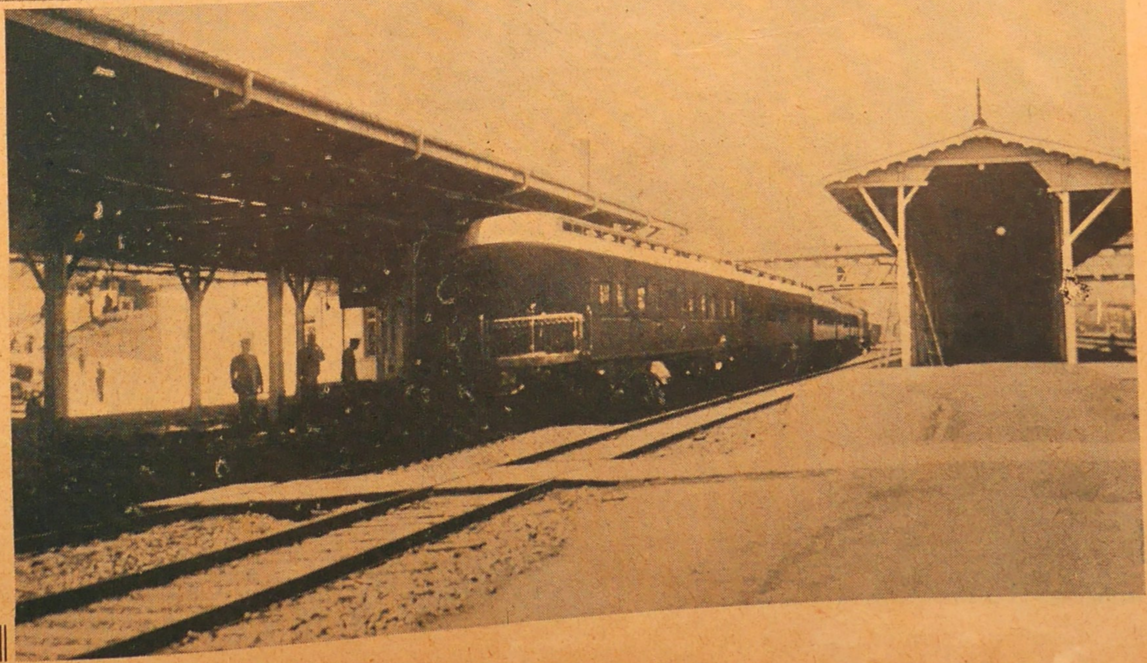
滿洲國帝政御慶祝のため、御名代として御渡滿遊ばされる秩父宮殿下には、康徳皇帝へ御土産として軍艦『長門』の模型を御贈進遊ばされることになり、同模型は高島屋で謹製、五月三十一日完成宮家へ納入された。(上圖)はその模型

滿洲国を擧げての 御名代宮殿下奉迎準備

帝政御慶祝のため、秩父御名代宮殿下の御渡滿に、康徳皇帝の御喜びは御格別の事と拜聞するが、滿洲國では國を擧げて感激し、滿洲國政府當局では、宮内大臣沈瑞麟氏を委員長とし、宮内次官入江貫一氏、總務廳長遠藤柳作氏を副委員長に各部要人を委員とする慶祝特使奉迎準備委員會を組織して、御歡迎に萬遺漏なきを期した。



(中圖)御名代宮殿下の御宿舎にあてられる日本大使館



(下圖)御名代宮殿下の御召列車

滿洲國では特使宮殿下の奉迎に萬遺漏なきを期するため、前記の如く沈宮相以下の奉迎準備委員會を設けて全滿を擧げて感激裡に諸種の準備を進めたが、同國政府は、奉迎費として、即位大典費追加豫算の際計上した慶祝費十萬圓に加へ第二次準備金十二萬七千八百圓支出の件を決定し、合計廿二萬七千八百圓の奉迎豫算を計上したかくて大連埠頭の整備、御召列車の編成各驛の補修、新京御道筋の鋪装、新京驛新京神社、御宿舍駐滿大使館の大改修をなし面目を一新して殿下の御著を御待ち申上げた。

（上右）は新京驛の下檢分（上中）は光榮の御召列車の車掌（上左）は同運轉手

桑折侍從武官新京到着

—駐滿海軍部に聖旨傳達—

畏き邊りでは、駐滿海軍部將兵御慰問のため、桑折侍從武官を御差遣あそばされたが、同武官は黑木中佐、松本少佐同伴、五月廿二日午後七時半新京驛着列車で、小林駐滿海軍部司令官以下の出迎へ裡に到着した。寫眞は新京についた桑折侍從武官と、出迎への小林駐滿海軍部司令官

満洲国最初の観兵式

満洲帝國最初の意義深い御大典観兵式は、五月十日、國都新京の南郊飛行場で、康德皇帝親臨の下に極めて盛大に擧行された。この日康德皇帝は大總帥の御正裝を召され、大勳位蘭花頸飾章を御胸間に燦然と輝かされ、殷々たる皇禮砲と嚠喨たる軍樂隊の國歌吹奏裡に午前十時半式場に御到着、オープン自動車に召されて約卅分にわたつて順次參加部隊を御閲兵引續き各部隊の勇壯なる分列式を臠はせられ同十一時四十分御歸還遊ばされた。

(上圖)勅語を賜ふ康德皇帝

(下右)観兵式諸兵指揮官于芷山上將

(下左)參列の菱刈關東軍司令官

滿洲國童子團に團旗を親授

滿洲國童子團に對する團旗親授式は、五月七日宮廷府興運門前廣場に於て行はれ、吉林奉天、黑龍江、熱河、北滿特別區、新京特別區の童子團各代表五百名は張理事長引率の下に參列、康德皇帝より光輝ある團旗を親授された。（上圖）は親授式後各團代表に閲を賜ふ康德皇帝

滿洲國の勳章

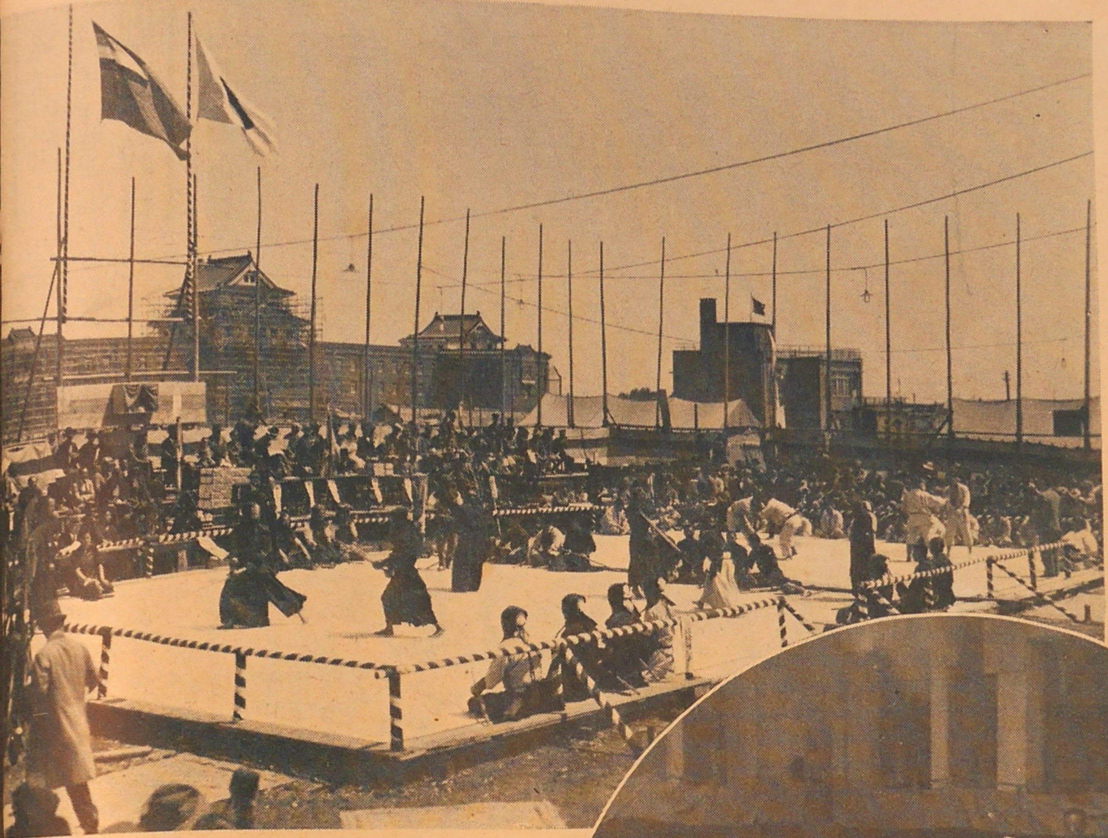
滿洲國政府では、先きに勳章條例を制定したが、皇帝は五月八日張軍政部大臣以下建國の功勞顯著な武官十名に對し最初の敍勳の御沙汰を賜ひ同九日宮廷府に於て親授式を行はせられた。（中右圖）は滿洲國の勳章で——右より——大勳位蘭花大綬章及副章、龍光大綬章及副章、勳一等景雲章及副章

× ×

（中左圖）は大典觀兵式式場のアーチ前の雜踏

（下圖）は同じく大典觀兵式式場に於ける正修童子團

登極大典記念の滿洲國全國武道大會



(上圖)武道大會會場の全景、(中圖)天覽柔道試合で、小谷、神田兩六段の柔道型、——張海鵬將軍が陪觀してゐる。——(下圖)この武道大會隨一の呼物滿人劍士による滿洲武術の型

登極大典を記念する滿洲國全國武道大會は、五月廿七、八の兩日に亘り、盛大に擧行された。先づ廿七日全國よりすぐつた滿人劍士、日本柔劍道選手二百五十餘名の强者參加して、豫選を行ひ、日滿兩國旗の下に、日滿劍士の熱戰、接戰は次から次へと展開され劍の響き勇ましい掛聲は滿洲の大野にこだまして勇壯を極めた。翌廿八日は午前十時半より宮廷府勤民樓に於て、康德皇帝親臨、日滿要人參列の下に、豫選を突破した晴れの選士によつて天覽試合が行はれ、先づ篠原、波多江兩敎士の日本劍道型によつて幕が開かれ、紅白劍道試合及滿洲武術が順次展開され、まことに御大典記念に相應しい光景であつた。

新京に於ける東郷元帥平癒祈願

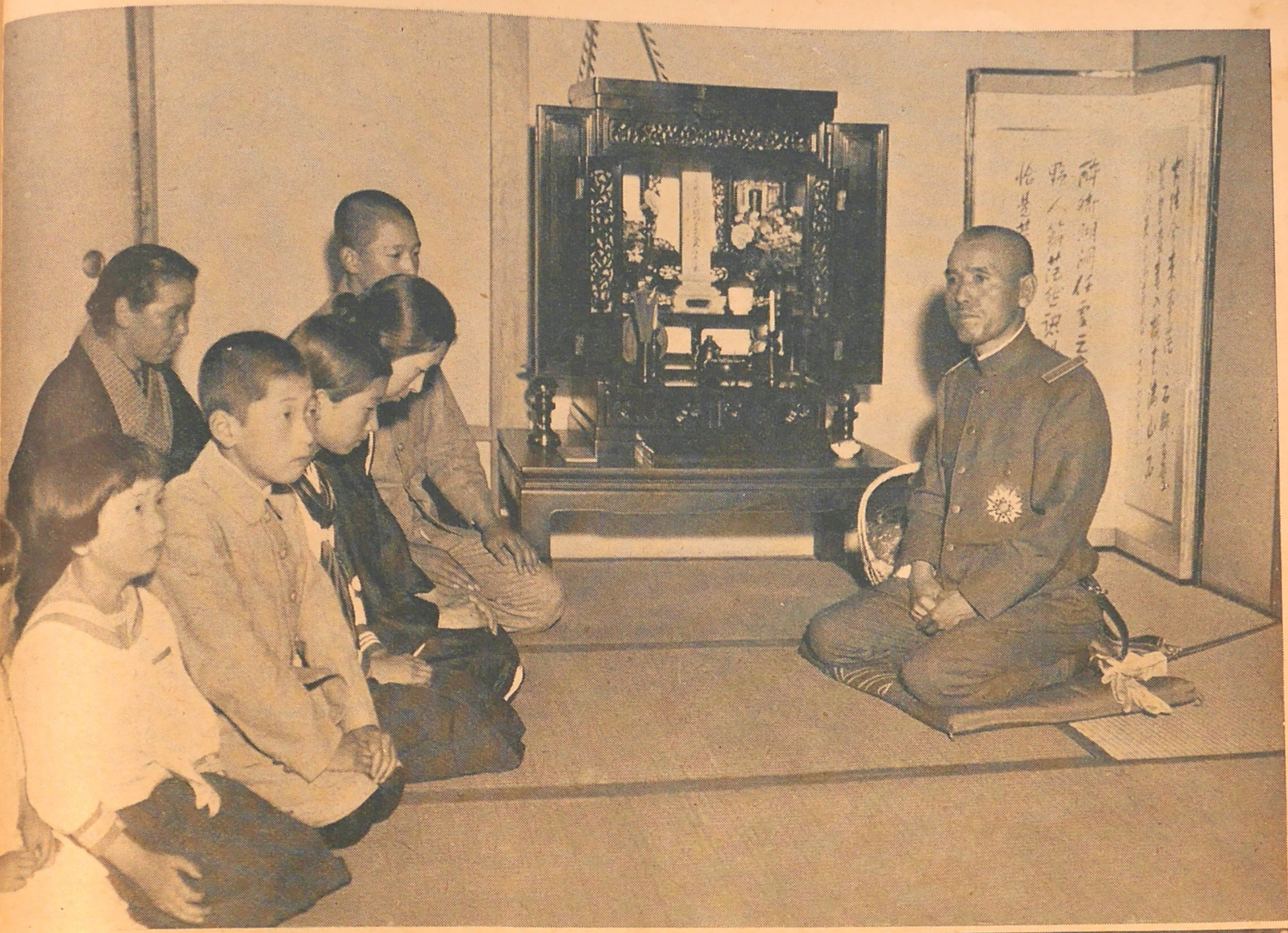
思ひ出の海軍記念日に、東郷元帥の病重しと傳へられるや、全滿在留邦人は一時に憂色に蔽はれ、元帥の快癒をひたすらに祈念したが、新京の海友會の人々は、新京神社に參集、國賓的元帥の平癒を神に祈つた。（上圖）新京神社に於ける東郷元帥の平癒祈願

サルバドル国の正式承認の感想を語る鄭總理

サルバドル國の滿洲國承認は全滿國民を感激せしめたが、建國以來勞々辛苦國家經營の衝に當つた鄭總理の喜びは又一入であつた。（中圖）は五月廿二日國務院に於て感激の面持ちで感想をのべる鄭總理

駐日公使に内定した閻傳紱氏

駐日滿洲國公使丁士源氏は病氣のため辭職を希望してゐるので近く歸國を許可する筈であるが、その後任には前奉天市長閻傳紱氏に内定してゐる。（下圖）は閻氏と夫人令息



廣瀨・畑兩將軍、帝都へ凱旋

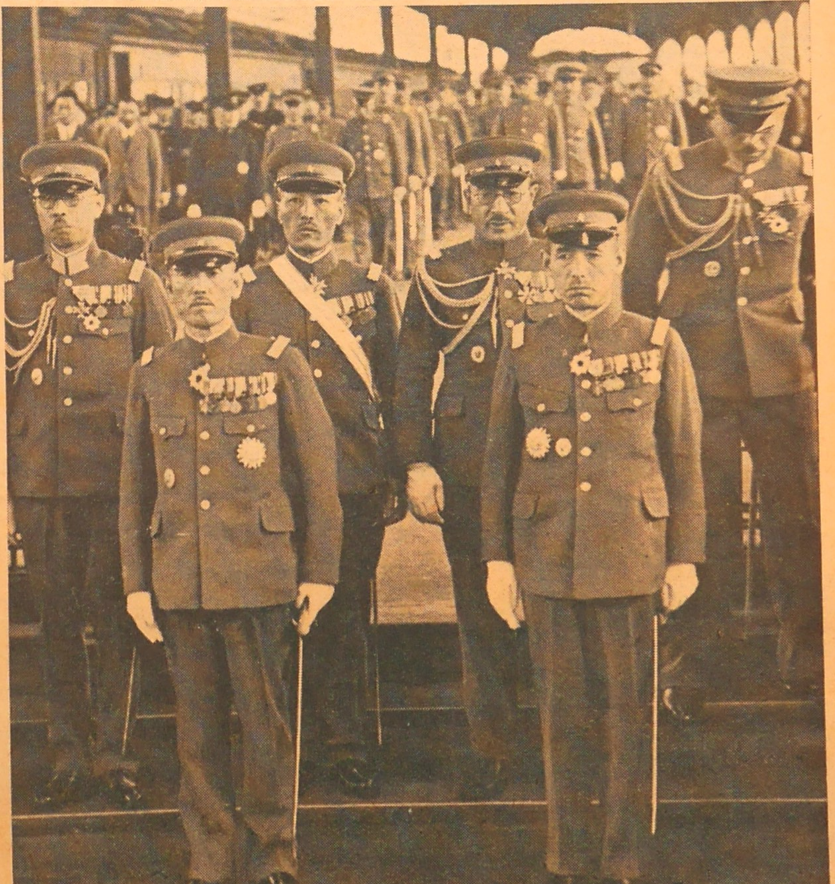
北滿の曠野に轉戰二ヶ年、不朽の武勳を樹てゝ先頃夫々原隊へ凱旋した第十師團長廣瀨壽助中將、第十四師團長畑俊六中將は、加納飯野兩參謀長、臼井、佐藤兩參謀、北澤、高橋兩副官を從へて五月三十一日午前九時四十分東京驛着、帝都へ凱旋した。一行は、出迎への各宮家御使、林陸相以下將星其の他と挨拶を交した後、畏き邊りより差廻された自動車に分乘し、驛前を埋めた歡迎市民の歡呼の嵐の中を二重橋から參內、同十時表御座所に參進、閑院參謀總長宮殿下、林陸相侍立のもとに天皇陛下に拜謁仰付けられ、廣瀨將軍は熱河、北滿等に於ける在滿中の軍狀を、畑將軍は二年前上海事變に際し出征して以來、更に滿洲各地に於ける討匪の狀況を具さに奏上して退下、更に桐の間に於て皇后陛下に拜謁仰付けられ、正午豐明殿にて御陪食を仰付けられた上、更に御紋章入り銀花瓶御下賜の光榮に浴し午後二時聖恩に感激して退下した。

(下圖)東京驛着の畑中將(右)廣瀨中將(左)以下幕僚

× ×

凱旋將軍として晴れの都入りをした廣瀨第十師團長は、過ぐる三月北滿の奧地土龍山に於て悲壯な戰死を遂げた部下の松江第六十三聯隊長故飯塚朝吉少將の事が忘れられず、その英靈を慰める爲め、忙しい滯京の日程を割いて六月二日午後多磨墓地に眠る故少將の墓前に默禱を捧げ、それより世田ケ谷代田に侘しく暮す遺族を訪問、懇ろに慰問した。

(上圖)飯塚少將の佛前にて遺族を慰問する廣瀨將軍と、とみ子未亡人其の他遺兒



ベルギー特使參內
—新帝の親書捧呈—

友邦ベルギーより、レオポール三世陛下御即位を我が皇室へ正式に御披露の爲め差遣はされた特派大使ウイリアム・タイス氏は、五月三十一日入京したが、翌六月一日晴れの參內をなし鳳凰の間に於て天皇陛下に謁見仰付けられ、同國皇帝陛下の御親書を捧呈し我が皇室に對し最高の儀禮を表し奉つた。この日タイス特派大使は大禮服に身を正し、午前十時十分畏き邊りより御差廻しの儀裝馬車に乘り、近衛騎兵小隊に儀仗されて宿舍帝國ホテルを出發、二重橋正門より參內、西溜の間に先着の駐日ベルギー大使パッソンピエル氏と共に鳳凰の間に參進、天皇陛下には御正裝にて鈴木侍從長以下を隨へさせられて出御、廣田外相侍立の下に謁見仰付けられ、特使には恭しく進み出てレオポール三世陛下登極御披露の使命を言上、御親書を捧呈した

(上圖)參內するタイス特使

(下圖)明治神宮參拜のタイス特使一行

大藏省に俄かの颱風

—次官・局長 相次いで拘引さる—

大藏省に俄かに颱風が襲來し、省內を混亂の淵につき落し、これをきつかけとして政局は頓に緊張の度を加へて來た。卽ち舊冬來財界一部で問題となり、今春に至つて番町會問題として遂に世上一般から疑惑の中心視されてゐた帝人問題は、俄然瀆職事件に進展遂に大藏次官黑田英雄氏が五月十九日朝東京地方檢事局に召喚、卽日起訴市ケ谷に收容されたを始めとし、大野特銀課長、大久保銀行局長、相田監理官等が相次いで召喚收容され、大藏省始まつて以來の大不祥事となつた。そしてこれは延いて高橋藏相の責任が論議され政局は一大緊張を示すに至つたのである。

(上圖)召喚される黑田前大藏次官
(下右)省內の不祥事件發生に、御機嫌斜めな高橋藏相
(下中)召喚される大久保銀行局長
(下左)新大藏次官藤井眞信氏(前主稅局長)

政界の暗雲も吹飛ばして 組閣二周年祝賀會

『非常時内閣』の看板をかゝげて齋藤内閣が成立したのが一昨年の六月廿六日、あれからもう二ケ年經過した。組閣當時は、そう長い壽命もあるまいといはれたこの内閣も、途中の幾多の危機も、得意の頬被りでおし通し、幾度か首のすげ換へをやつて、スロー、スローといひながら、ともかく二ケ年の難路を突破して來た。

まづ御目出度いとあつて、五月廿六日正午から首相官邸で組閣二周年記念の祝賀會が開かれたこの祝賀會には前閣僚の岡田、荒木、鳩山、中島、内田各大臣及び柴田前翰長も出席する筈であつたが、荒木大將は特命檢閲使として東北出張中であり、内田伯は病氣、柴田氏は兩親の訃で服喪中、鳩山、中島の兩氏は逃げを打つて出席せず、岡田大將だけが出席、さて一同が揃ふと、黒崎法制局長官、藤沼警視總官も加はつてまづ庭先で記念撮影をなし、それから午餐會にうつり、一同シャンパンをポン〳〵抜いて、大藏省の不祥事による政界の暗雲も吹き飛ばす勢ひで内閣萬歳を叫んだ。

（上圖）はその組閣二周年記念祝賀會に於ける記念撮影

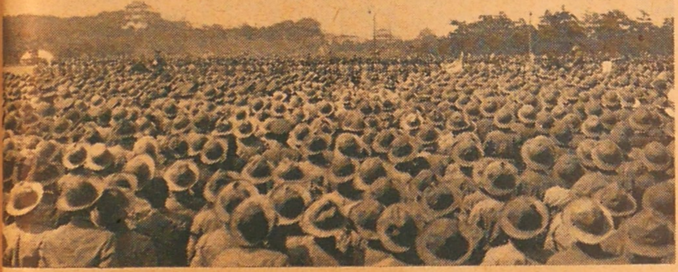
政界一入緊張を加へるの時 宇垣朝鮮総督入京

襲ひかゝつた幾多のピンチを得意の頬被り、巧みな首のすげかへで切拔けて來た齋藤内閣も今度の大藏省の不祥事は、事が現内閣の一支柱たる高橋藏相の進退に關するだけに可成りの痛手に相違ない。目下靜觀主義で形勢觀望の形であるが、政變は必定と見る向きが多い樣であるこの政局緊張の度を加へて來た際に、――五月卅一日午後四時五十五分東京驛著列車で、朝鮮總督宇垣一成大將が入京した。何しろ後繼内閣首班に目されてゐる人が、この時期に入京したことゝて、政界は一段の活氣を呈した。

（下圖）は齋藤首相を訪問した宇垣總督

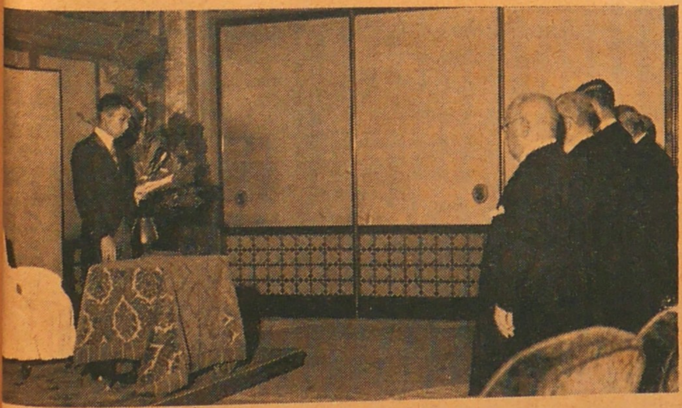
皇后陛下慈恵會総會行啓

皇后陛下には五月廿四日、御三年ぶりで東京慈恵會第廿七回總會に行啓あらせられた。この日陛下には清楚な御洋裝を召され、竹屋女官長御陪乘、廣幡皇后宮大夫以下供奉申上げ略式自動車鹵簿にて午後二時廿分宮城御出門、慈恵會に行啓、會長德川家達公はじめ役員一同の奉迎をうけさせられて御著便殿に於て御先著の各皇族妃殿下と御對面の後、式場に臨御、式を終へさせられて後高木院長の御先導にて病院各施設を台覽あらせられた。寫眞は標本を台覽遊ばされる陛下



昨夏、東京市を中心として行はれた關東防空大演習を機として結成された東京市聯合防護團では、皇太子殿下の御降誕を奉祝して、五月十七日午後一時半から宮城前廣場で、秩父宮殿下の台臨を仰ぎ閲團式を行った。寫眞はその閲團式

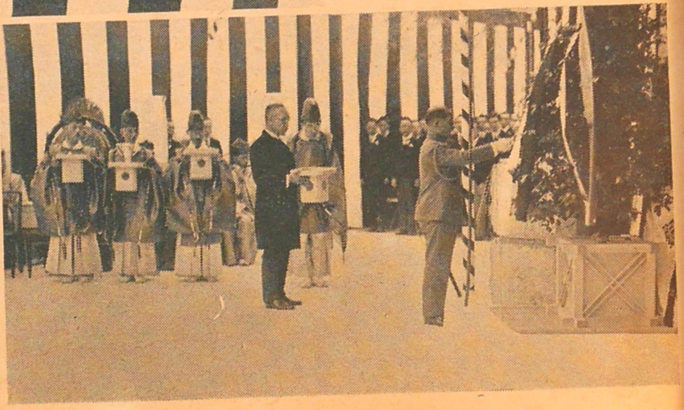
國際文化振興會では對内的にも對外的にも更に一層の發展を期する爲め同會總裁に高松宮殿下を懇請中の處御快諾を得たので、五月卅一日午後二時半から東京會館に於て盛大な總裁奉戴式を擧行した寫眞は高松總裁宮殿下の御令旨



東京西巢鴨家庭學校跡に建築中であつた財團法人癌研究會の癌研究所は、この程完成したので、五月廿日午前十時より總裁伏見宮殿下の台臨を仰ぎ盛大な開所式を行つた。寫眞は式後治療室でレントゲンを御覽になる伏見宮殿下

天皇陛下
海軍記念日祝賀式典へ行幸

意義深い第廿九回海軍記念日祝賀式典は、五月廿七日築地海軍經理學校に於て、畏くも大元帥陛下の行幸を仰いで嚴肅に擧行された。この日、陛下には本庄侍従武官長御陪乗申上げて午前十一時卅分宮城御出門、一同お待ち申し上ぐるうち同十一時四十五分經理學校著御、便殿に於て御先著の各宮殿下と御對顔の後、大角水交社長はじめ參列將星に謁を賜ひそれより祝賀會場に臨御、宴後軍需品等を天覽あらせられて後、餘興相撲場に出御、玉錦、武藏山等の壯烈な競技を天覽遊ばされた。寫眞は相撲を天覽遊ばされる陛下



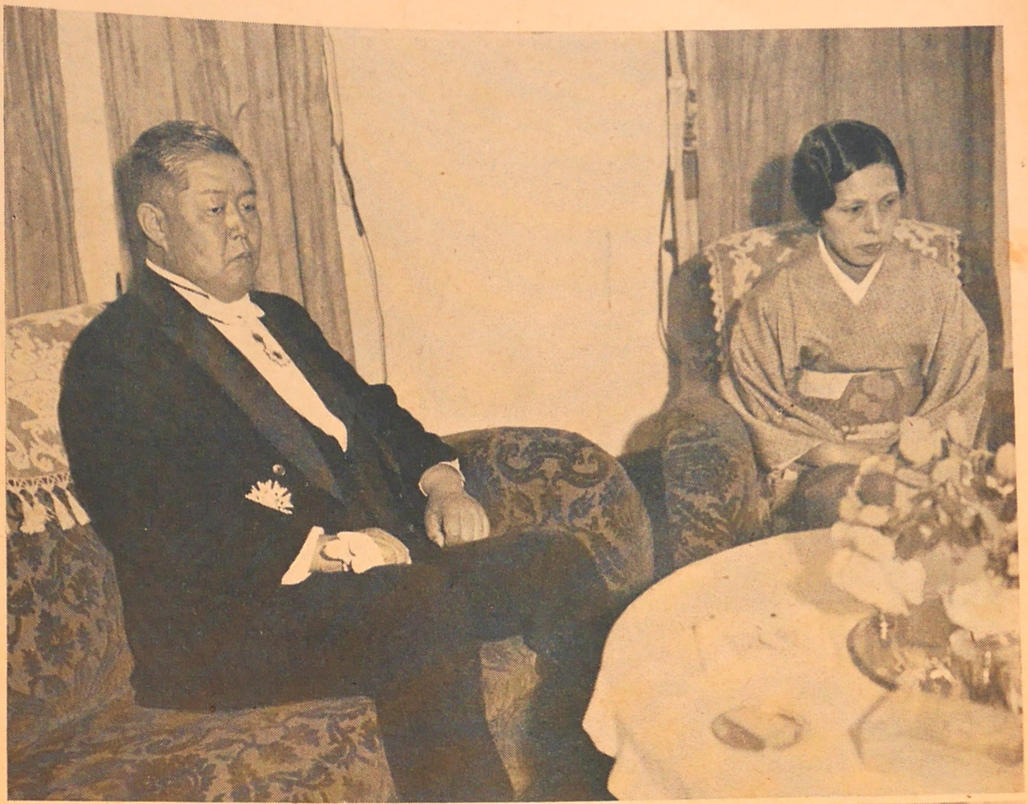
日本銀行の第二期増築工事は、漸く鐵骨工事が完了したので、六月一日午前十一時十分から、閑院元帥宮殿下の台臨を仰ぎ、嚴かな定礎式を擧行した。寫眞はその定礎式に台臨の閑院宮殿下

犬養木堂翁が兇彈に殪れてから早くも二星霜、五月十五日のその三回忌には政友會と犬養家の共同で上野寛永寺に大法要が營まれたが、嗣子健氏夫妻並びに令息令孃等は、これに先立ち十四日朝青山墓地に詣で、故翁の靈を慰めた。寫眞は墓前に額づく健氏等

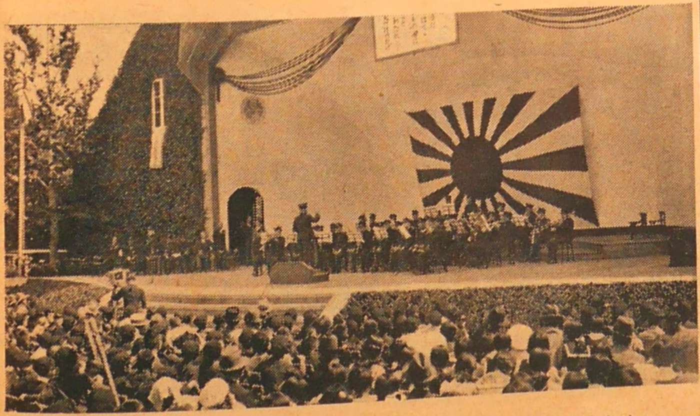
皇太子殿下御降誕奉祝記念の爲め小笠原長生子、頭山滿翁、中村吉右衛門丈等が發願人となつて光雲氏が一刀三禮の式で彫刻した觀世音菩薩の開眼供養は、五月廿三日午後、本郷の大圓寺で嚴修された。寫眞は參列の頭山翁、小笠原子、吉右衛門丈等

新駐伊大使 杉村陽太郎氏

駐伊大使松島肇氏は、かねて病氣保養のため、賜暇歸朝辭任を申し出て來てゐたので、廣田外相は後任として前國際聯盟事務次長兼政治部長としてジユネーヴで活躍した杉村陽太郎氏を起用する事とし、イタリー政府に對しアグレマンを要求、同國政府より受諾の正式通告に接したので、五月廿六日午前九時半、宮中鳳凰の間に於て、齋藤首相侍立の下に同氏に對する駐伊大使の親任式が行はせられた。寫眞は親任式を終へて自宅に歸つた杉村新駐伊大使と夫人



大滿洲國正義團主催の、五十餘名からなる『訪日致謝親睦視察團』は小林理事に引率され五月廿一日午前十時十五分東京驛着の列車で入京した。寫眞は二重橋前に於いて萬歲を唱へる同視察團



帝國海軍の偉容と、海國日本の意氣を象徴する軍艦旗献納式は、五月廿六日午後一時から、日比谷音樂堂に於て、海洋少年團、國防婦人會、青年團等約三千人參集して盛大に擧行された。

軍國の世に相應しい陸海軍兩大將家のおめでた—陸軍大將鈴木孝雄氏令息英氏と、海軍大將岡田啓介大將令孃貴美子さんとの結婚式は、五月廿六日午後三時から九段の偕行社で擧げられた。

上高地明神池の 幽邃境

島々からのドライヴウェイや世界に誇る山岳ホテルの出現で、上高地も近頃はスッカリ都會化されてしまひました。足弱の女子供でも自由に山靈の爽氣に接す事が出來る。危險は少しもない、――といふので、我も〳〵と押かける人の群、上高地に銀座通りが出來たなど〻云ふ盛觀だ相です。出來る丈多くの人が山の自然に接すると云ふ事は結構にはちがひありませんが、山の都會化はナントしても感心しません。矢張山は山の自然を生かして置き度いと思ひます。ある程度までの勞力と苦しみがあつてこそ山へ登る意味があるのです。疲勞し切つた體を岩間の湧湯に浸す時こそ登山の醍醐味が感ぜられるのであります。ましてや、天幕作りのカフェーが並んでゐるなどに至つては言語同斷といはなければなりません。この點において上高地は遺憾の點が多い様ですが、梓川の美しい流れや明神池の幽邃境は何時に變らぬ山の魅惑を湛えてゐるのであります。寫眞は綠樹欝蒼と茂る明神池の靜寂境です。

支那四川省の水車

支那の風物は一體に大陸的で變化に乏しく、やゝもすれば無味乾燥の譏りを免れませんが、四川省は、全省が雄大な公園だといはれてゐるだけに、その山水、中々秀麗で、情趣に富んでゐます。寫眞は錦江の急流に絶間なく廻轉してゐる水車で、これは全部竹でこしらへられてあつて、廻轉するにつれて河の水を汲み上げて、高い田地に灌いでゐますが、四川省には至る所にこの式の水車を見受けます。灌漑用のこの水車によつて、あたりの風趣も亦大いに添へられてゐるではありませんか。

夏でも寒い御嶽山の遠望

『木曾の御嶽山は夏でも寒い――袷せやりたや足袋そへて……』郷土俚謡に唄はれた御嶽山は優さしい女性的な感じを抱かせるが、開山中興の祖師覺明、普寛の二行者は荒行者として名高い。從つて古から軍神として武家武門の信仰厚く、人事百般に靈驗灼たかなので、信徒實に三百五十萬を數へる。祭神には國常立命、大巳貴命、小彦名命をまつゝてゐる。山の風光又絶佳をきはめ靈山にふさはしい雄姿は堂々四山を壓し日本アルプスの西方に聳立してゐる。快晴の日は遠く伊勢の海をのぞみ遙か雲海蟠かまる彼方に伊勢大廟を拜する事が出來る。夏の登山シーズンになると『六根清淨』を誦する白衣道者の間に、リユック姿も甲斐々々しいピークハンターを見受ける。

日米親善の數々の使命を帶びて 近衛公渡米

日米親善のため、數々の使命を帶びた貴族院議長近衛文麿公は、五月十七日午後零時半東京驛發の臨港列車で出發、同三時横濱解纜の淺間丸で鹿島立つた。公の今度の渡米は、議會明けの小閑を利用して、昨今、兎角面白からぬ日米關係の融和を圖り、傍ら今秋プリンストン大學へ入學する令息文隆君を訪ひ、更にまた國際文化協會の總裁として、大いに日本の文化を彼地に紹介すべく、十五年ぶりの渡米である。

何分にも公は華胄界の名門であり、貴族院議長の要職にあり、また國際的にも知名の士であるだけに、東京驛頭の見送りは極めて華やかで、德川公、グルゥ米國大使、松平貴族院副議長や華胄界の御歷々、各閣僚、貴衆兩院議員等が見送り、公は横濱まで見送る家族と共に、角倉貴族院書記官を從へて、萬歲の聲に送られて出發した。

寫眞は盛んな見送裡に東京驛出發の近衛公（○印）、×印は米國大使△印は松本商相

經濟團体の日蘭會商代表送別宴

東京商工會議所、日本經濟聯盟會、南洋協會、日本貿易協會の四團體聯合主催の日蘭會商帝國代表一行送別午餐會は五月十五日正午工業クラブに開催された。（上圖）はその送別宴で、左端立つて挨拶するは帝國代表長岡春一大使――尙ほ、長岡代表及び顧問、木村銳市、山中清三郎兩氏の一行は、五月十七日午後九時東京驛出發、途中大阪に於て當業者と最後的打合せを行ひ、十九日午後四時神戸出帆の大阪商船さんとす丸で、會商地ジャワの首都バタヴィアへ出發した。

日印會商の澤田代表歸朝

日印會商（昨秋九月インドのシムラで交渉を開始以來折衝を重ね、今年一月五日に至つて大綱を協定、四月十九日に至り漸く假調印を了した）の大任を果して、同會商帝國首席代表澤田節藏氏は、五月十三日神戸入港の長崎丸で歸朝、翌十四日、午後零時卅五分著列車で、廣田外相以下多數の出迎へを受けて歸京した。（下圖）東京驛著の澤田代表と出迎への廣田外相

各国大公使を招いて国際文化振興會の茶會

外務省文化事業部と緊密な提携を保ち、文化外交工作に努めてゐる國際文化振興會では、五月廿二日午後四時より、華族會館にバッソンピエルベルギー大使、グルゥ米國大使以下在京各國大公使全員及び夫人を招待し、來賓として齋藤首相廣田外相、芳澤謙吉、石井菊次郎、櫻井錠二博士、振興會より副會長徳川頼貞侯理事長、樺山愛輔伯等各方面の名士百餘名出席して、茶會を催した、（上圖）同茶會に於ける――右より米大使、一人置いて齋藤首相、廣田外相他各國大公使連

濠洲の親日代議士秋田議長を訪問

濠洲の親日代議士、前鐵道大臣サー・トーマス、ヘンレー氏は、スチブンス首相、パーカー國會議長、レーヴィ・シドニー市長三氏の書簡を携へて五月十三日入京、翌十四日午後齋藤首相、牛塚東京市長、秋田衆議院議長を夫々訪問して右の書簡を手渡した。（下圖）秋田議長を訪問したヘンレー氏

親日の三米人
林陸相訪問

親日三米人――滿洲視察を了へて歸米の途にあるカンサス大學の歷史學部長デヴィス博士と、數年間每年の樣に京都の南禪寺で座禪修行をしてゐる有名な辯護士エベレット氏及同夫人――は五月廿四日午後三時半林陸相を官邸に訪問種々懇談した。(上圖)會見中の右よりデヴィス氏、エベレット氏、同夫人、林陸相

印度から
少年團來朝

日本の少年團と交驩を兼れて『サムラヒ』の國を視察のため、五月十六日神戶入港の白山丸で來朝した印度の少年團一行六名は、關西各方面を遊覽した後、同十八日入京した。(下圖)は、五月廿一日華族會館に於ける日本少年團理事長三島子の歡迎茶話會に臨んだ一行、中央は三島子

サルバドル国満洲國を承認
—不承認の共同戦線破る—

友邦滿洲國は、去る三月一日帝政を實施し、國礎愈々固まつて、治安は確保し、文運は興隆し、産業は振興して、新興帝國として堂々たる興隆ぶりを示してゐるが、かく滿洲國の國内整備と、國際的地保の確保と共に、一部國家間に於ては、滿洲國承認の機運が動きつゝあつたが、今回、中米のサルバドル共和國は、各國に魁けて三月三日付を以て滿洲國承認の擧に出でた。即ち滿洲國駐日公使丁士源氏は、五月廿一日午後七時同公使館に於て駐日サルバドル國總領事レオン・シグエンサ氏の五月十九日付、滿洲國を承認した書簡並びに覺書を發表した。サルバドル國は一九二四年に國際聯盟にも加盟して居り、我が日本に次いで滿洲國を承認したことは、全世界より注視され、國際聯盟の滿洲國不承認主義が事實において崩壞したものと重要視されてゐる。この聯盟加入國たるサルバドル國の承認を楔機として滿洲國を承認せんとする國もある模様であり、これは滿洲國の喜びのみでなく、友邦として我々も同慶にたえない所である。

列國に率先して滿洲國を承認したサルバドル國は中央アメリカの太平洋岸に面する火山國で、面積は約一萬三千餘方哩で、大體我が樺太位の大きさ、人口は百五十萬ある。十九世紀の初め頃中米聯邦の解消によつて獨立の共和國となり、現大統領はマルチネス將軍である。住民は土人とスペイン人との混血族が主で、國語としてはスペイン語が行はれ、産業は農業を主としてコーヒーが唯一の特産品である。我國と條約は締結されてゐないが總領事を東京に派遣してゐる。

(上圖)率先して滿洲國を承認したサルバドル國の總領事レオン・シグエンサ氏

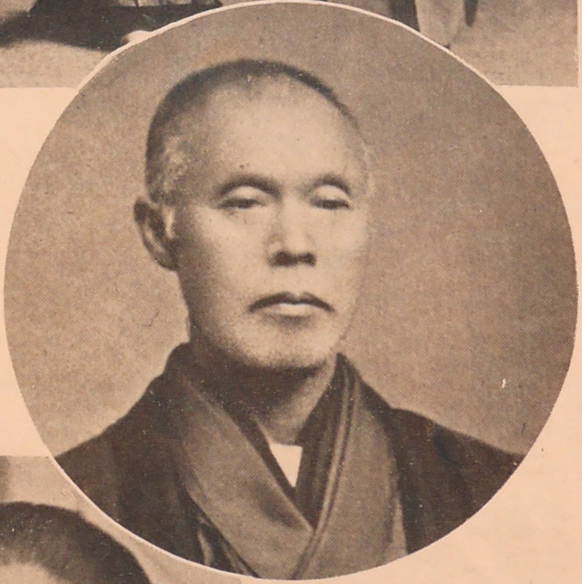
サ國總領事に記念品贈呈
—國民外交同盟が—

今般サルバドル國が列國に率先して滿洲國を承認した擧に感激して、國民外交同盟の代表者飯塚米雨氏は、五月廿三日正午帝國ホテルにサ國總領事シグエンサ氏を訪問し、南畫の大家長井雲坪筆の蘭花の掛物一個を贈呈した。(下圖)は其の掛物を受けるシグエンサ總領事

軍國日本の誇り 八人の兵隊さんを出した増田家

今度陸軍大臣から表彰された、東京府の一家三名以上軍人を出した名譽の家は二千六百五十家庭あつたが、その中に一家から八人の兵隊さんを出して、銀盃一組を贈られた武人の家がある。

この譽れの家は、東京市芝區新堀町の増田光太郎氏の一家で、當主の光太郎（五二）を初めとして、金三郎（四五）喜四郎（四三）長五郎（四〇）三郎（三六）七郎（三四）の六人の兄弟が揃ひも揃つて天晴れ帝國の干城として軍務に服し、その上光太郎氏の長男光次郎（三三）次男光三（三一）の二兄弟もまた軍人となり兄弟叔父甥八人が國の護りにつくしたもので、まことに我が軍國日本の誇るべき一家である。同家では父佐吉氏は十六年前に死亡したが兄弟何れも近所に居を構へて他所目も羨しい程の親密さで、この點だけでも表彰の價値が充分あるさうだ。



（上圖）――前列向つて右から金三郎、榮二郎、光太郎、七郎、――後列、三郎、喜四郎、長五郎、――圓内右は光三、左は光次郎の諸氏（下）は父親佐吉さんと、母親かれ女

報國兵器命名式

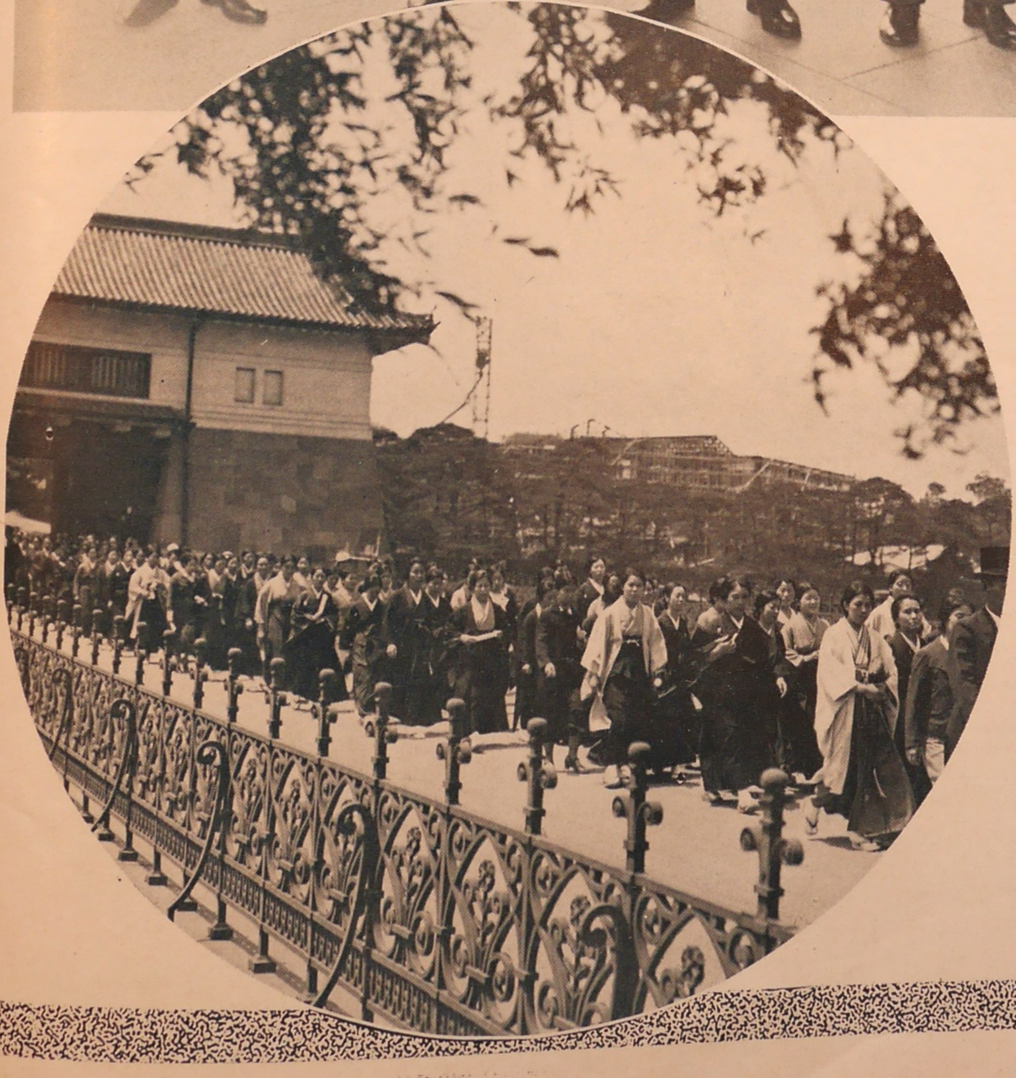
昨年七月以降、航空機以外の兵器充實費として、全國辯護士會、東京社交舞踏場組合ほか各方面から海軍へ献金された資金で製作した航空燈臺、機銃付サイドカー、空中聽音機等の命名式は、五月十九日午後二時から大角海相以下各局部長、献納者など代表參列の下に盛大に擧行された。（上圖）はその献納兵器である。

日活のスター連が戰傷勇士を慰問

日活のスター數名は、五月廿二日午後一時半、牛込の第一衛戍病院を訪れ、靜かに病を療養してゐる戰傷兵を慰めた。近頃はもう訪れ慰める人も少く、まことに淋しい日を送つてゐた傷病兵達は、このスター連の訪問に、何れも大喜びであつた。（下圖）は慰問中の一行で、映畫ファン御馴染の星玲子、深水藤子等がみえる。

五帝大総長に御陪食を賜ふ

天皇陛下には、五月廿三日正午、小野塚(東大)松井(京大)松浦(九大)本多(東北大)高岡(北大)各總長を宮中竹の間に召され、閑院元帥宮殿下御臨席、齋藤兼攝文相、東郷、粟屋兩次官、湯淺宮相等側近奉仕者と共に御陪食仰付けられた。(上圖)光榮の——向つて左から、小野塚、松浦、本多、松井、高岡の諸氏



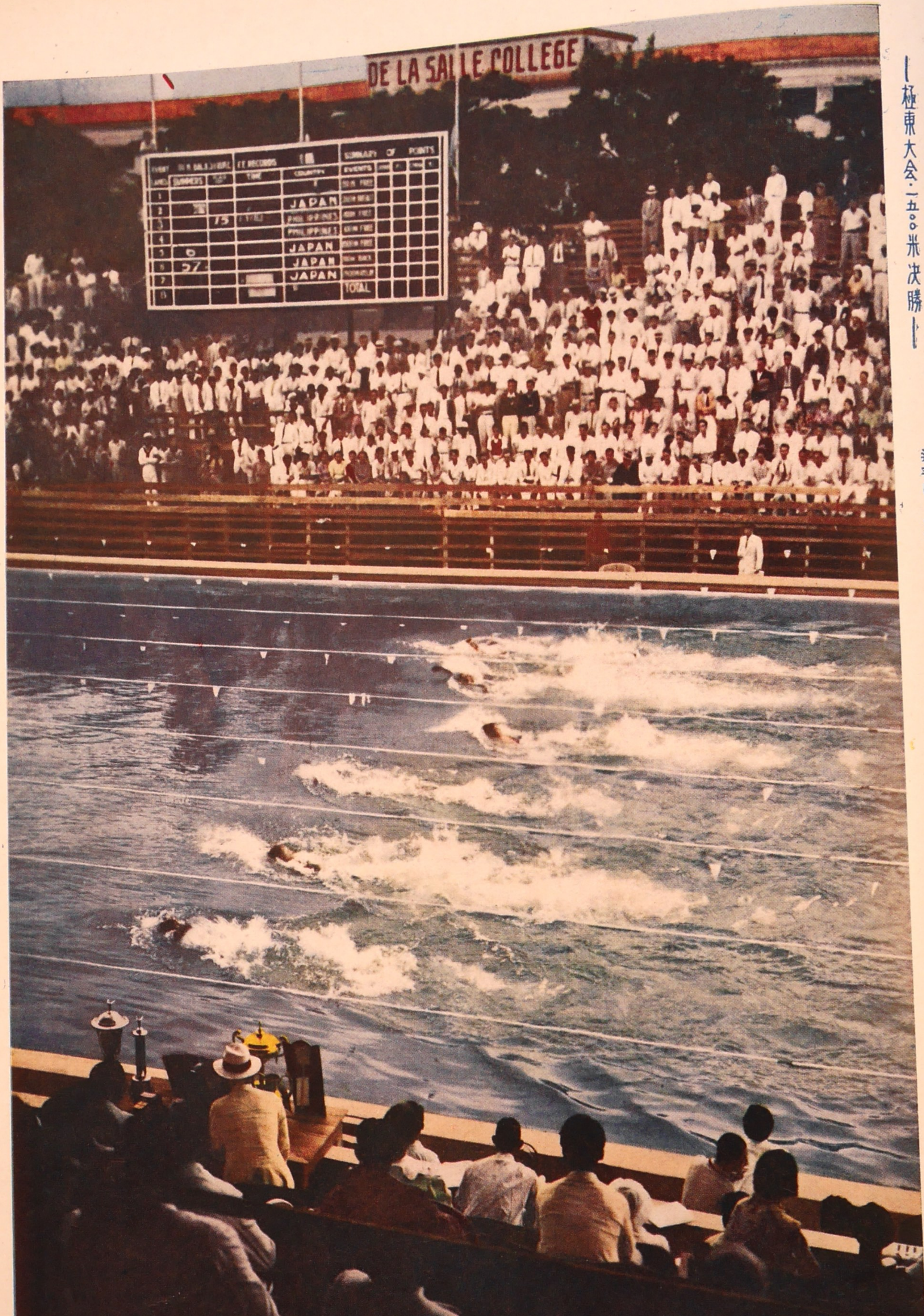
女敎員の光榮 御養蚕所を拜觀

都下の小學校から選抜された女敎員五百名は、五月廿三日特に許されて宮中楓山御養蠶所を拜觀した。一同は二班に分れ第一班は葛岡視學課主事に、第二班は落合助役、小柏視學課主事に引率されて參內、有泉御養蠶主事の御案內で皇后陛下の御精勵の御跡を拜觀した。(下圖)坂下門より退下する女敎員

名流と鐵橋の美

ースウェーデンのアンゲルマネルヴェン川とフォルスモ鐵橋ー

北部スウェーデンのアンゲルランドを流れるアンゲルマネルヴェン川は、數多いスウェーデンの河川の中でも最も美しいといはれる河流です。このスウェーデンは、世界でも名高い大森林國で、殊に北部スウェーデンは殆んど全部が大森林だといつてもよい位ですが、この大森林を縫ひ、或は峨々たる斷崖の峽谷を割つて流れ下るアンゲルマネルヴェン川は、清冽で、その急湍の美は流石スウェーデン第一の名流たるの名に愧ぢず、見る者をして思はず快哉を叫ばしめます。寫眞はアンゲルマネルヴエン川口の風光で、鐵橋はフォルスモ橋です。

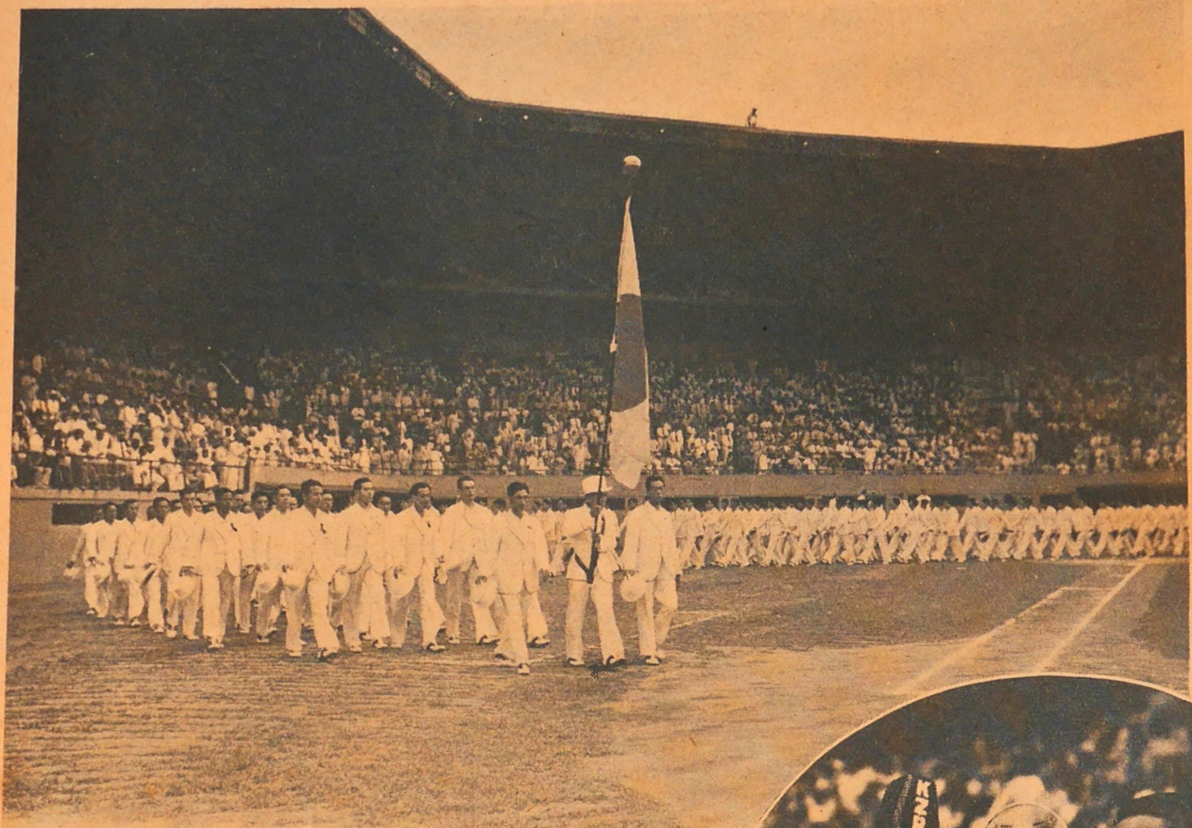


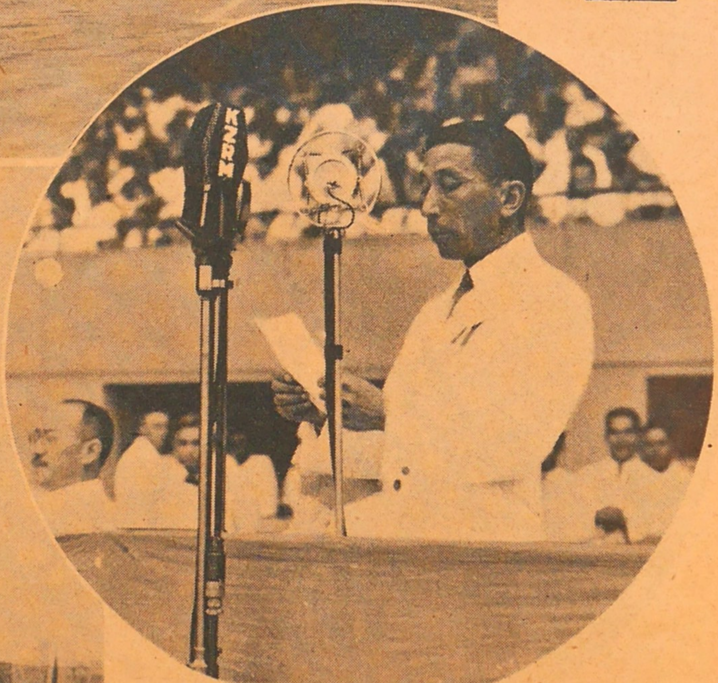
輝く水上日本
極東無敵の覇もものふ

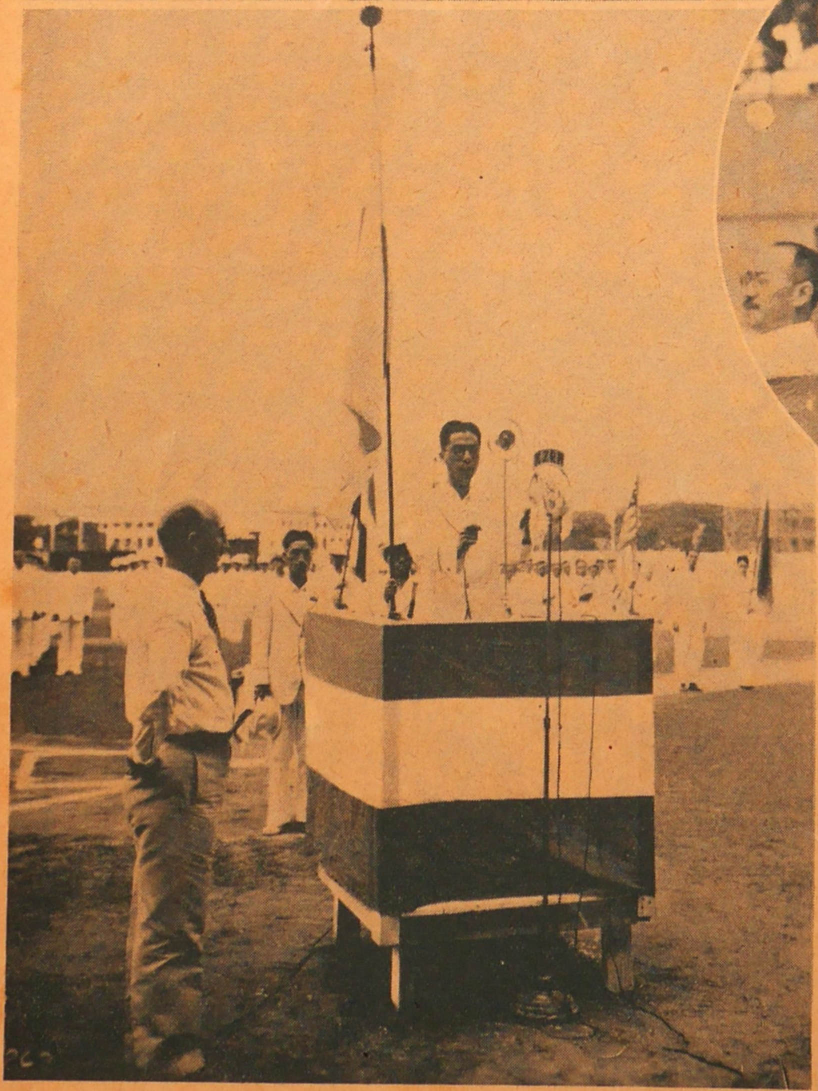
「極東大会・一五〇〇米決勝」

マニラに於ける第十回極東大會で、輝く水上日本は豫想の通り無敵の制覇を成しとげた。比類なきその偉力は、斷然他を壓して追随を許さず、我が强豪は各レース毎に轡を並べてゴールに入り、連續日の丸は翻り、君が代は奏樂されて在留邦人をして狂喜亂舞せしめた。唯千載の一痕ともいふべきは、二百米平泳決勝に於いて我が小池選手がイルデフォンゾに敗れた事であるが、然し記録は全部我が選手によつて出されて居り、その底力は壓倒的なもので、堂々と覇者の貫祿を示した。（寫眞は千五百米決勝）

第十回 極東大會







滿洲國の參加問題で紛糾をまき起し、一時危機に瀕した第十回極東大會も、我が國が大國の襟度を示して堂々と參加したことによつて危機を脱し、日、比、支の外に新たに蘭領インドを加へて、五月十二日から旬日に亘りマニラのリザル競技場で行はれた。本大會は開會前に滿洲國參加に關する紛糾があり、競技的には度重なる審判問題を惹起し、あまつさへ惡天候に災ひされ、更にまた定時總會では遂に支那と絶縁して、極東大會解消にまで至つた。かくて第十回極東大會は極まりなき波瀾の裡に五月廿一日幕を閉ぢたのである。

× ×

(上圖) 秩父宮殿下御下賜の大日章旗を先頭に我が選手の入場——旗手は佐藤選手

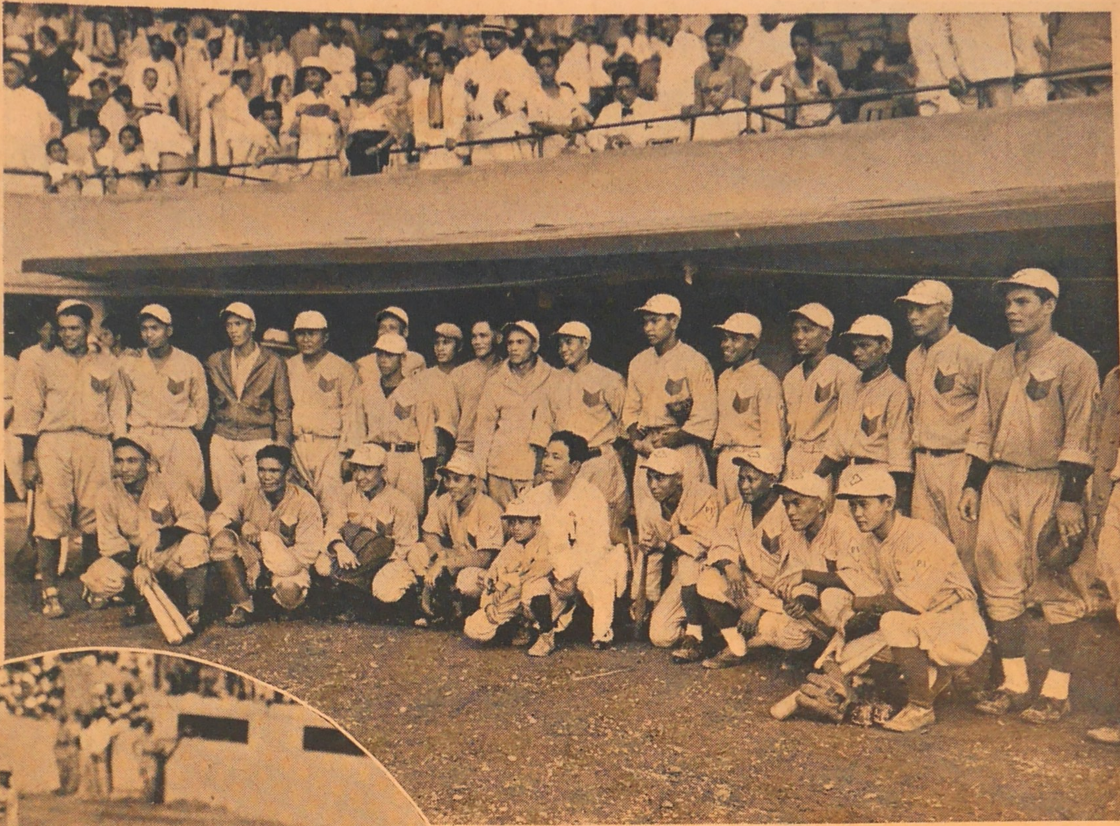
(下右) 挨拶を述べる平沼日本チーム團長

(下左) 牧山日本代表選手の宣誓

野球

支那は問題にならず比島が第一位を占む

野球は支那は餘りに弱すぎて問題にならず、日本と比島の對立に興味はつながれてゐた。戰前の豫想では五分と五分だと評されてゐたが、試合前に我がチームは第一投手中村君が傷き出場不可能となつたために非常な痛手を蒙り、また比島の打撃は物凄い當りを見せてゐたために第一回戰に日本は七對零で大敗し、第二回戰は十回ゲーム二對二の接戰で日沒ドロンゲームとなつて比島に一矢を酬ゆる事が出來ず、遂に比島をして名を成さしめてしまつた。



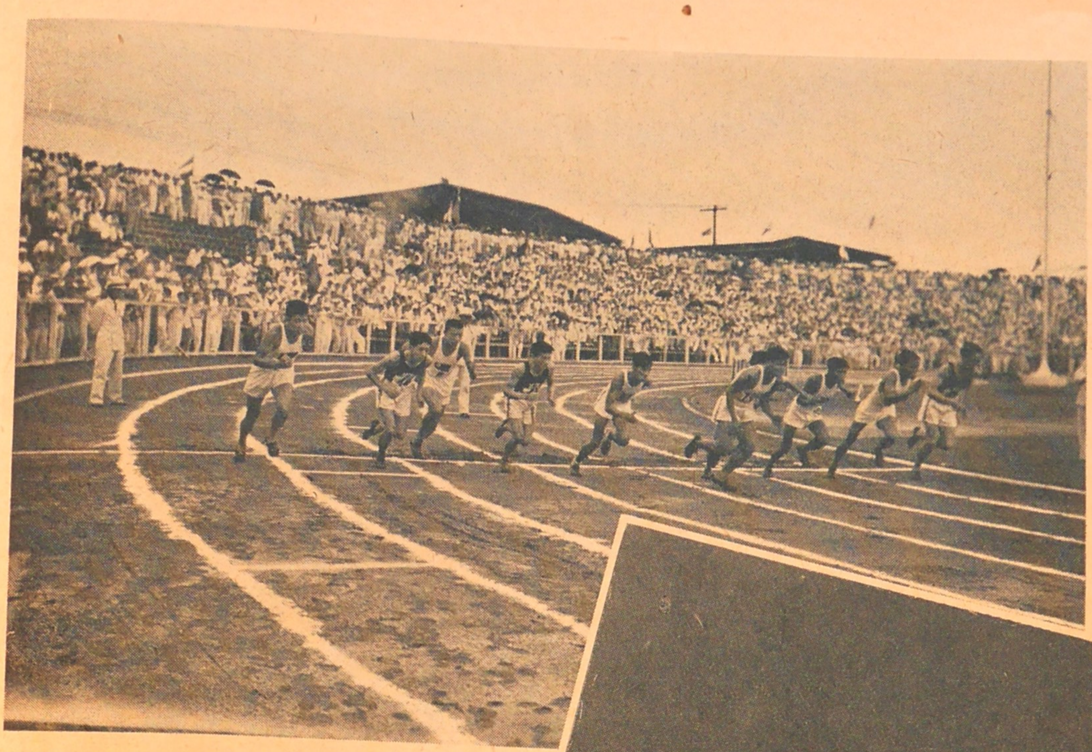
(上圖)健棒を集めてよく戰ひ一位となつた比島チーム(中圖)日比野球第一回戰、七回裏、左中間安打に出たエスカモス君が續くビルチルボの安打とサンタローザの安打によつて生還したところ(下圖)日本チームのベンチ中央に足に繃帶してゐるのが中村投手

日支蹴球戰

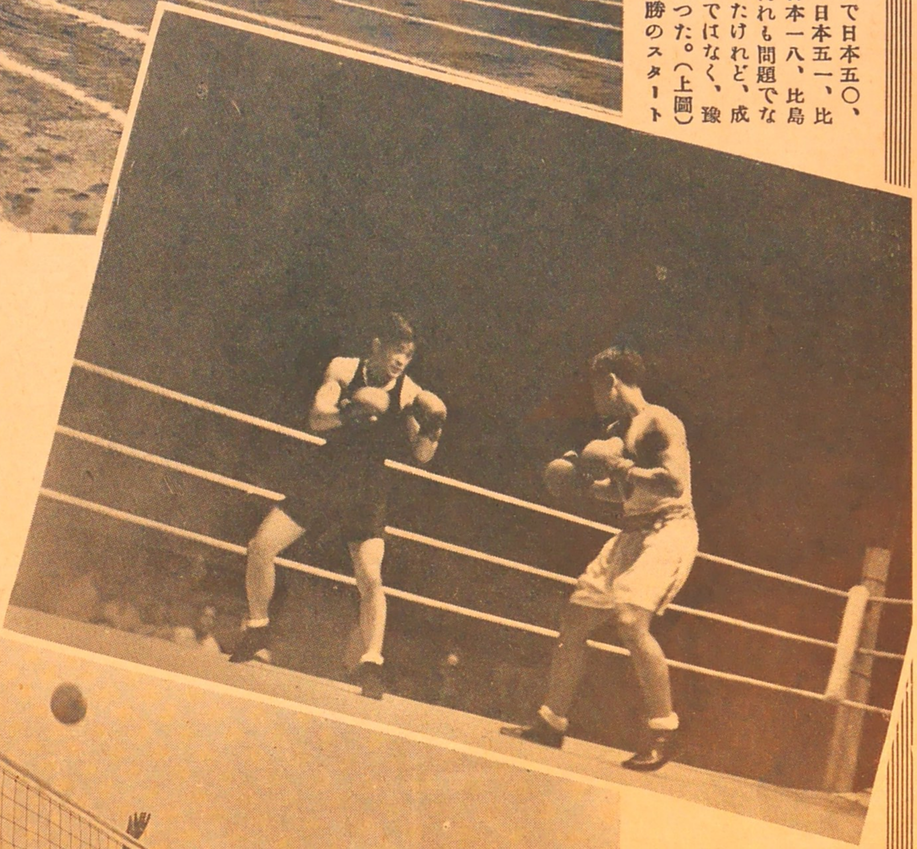
蹴球は中華斷然强く、日本、比島、蘭印を夫々敗つて第一位となつた。日本チームは、後藤、安部鈴木、松丸等の闘士が、或は病み、或は傷いてゐたために、非常な打撃を蒙り僅かに比島に一回勝つただけであつた。

寫眞は日支蹴球戰

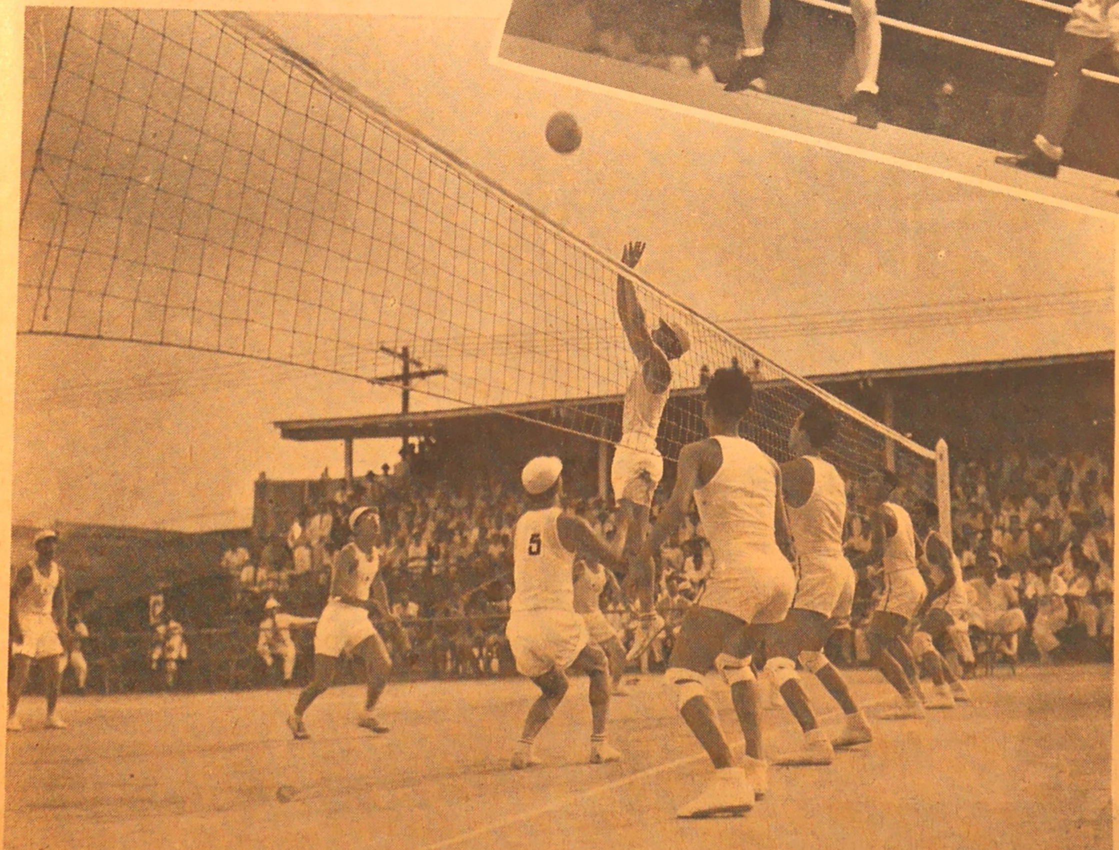
陸上 拳闘 排球



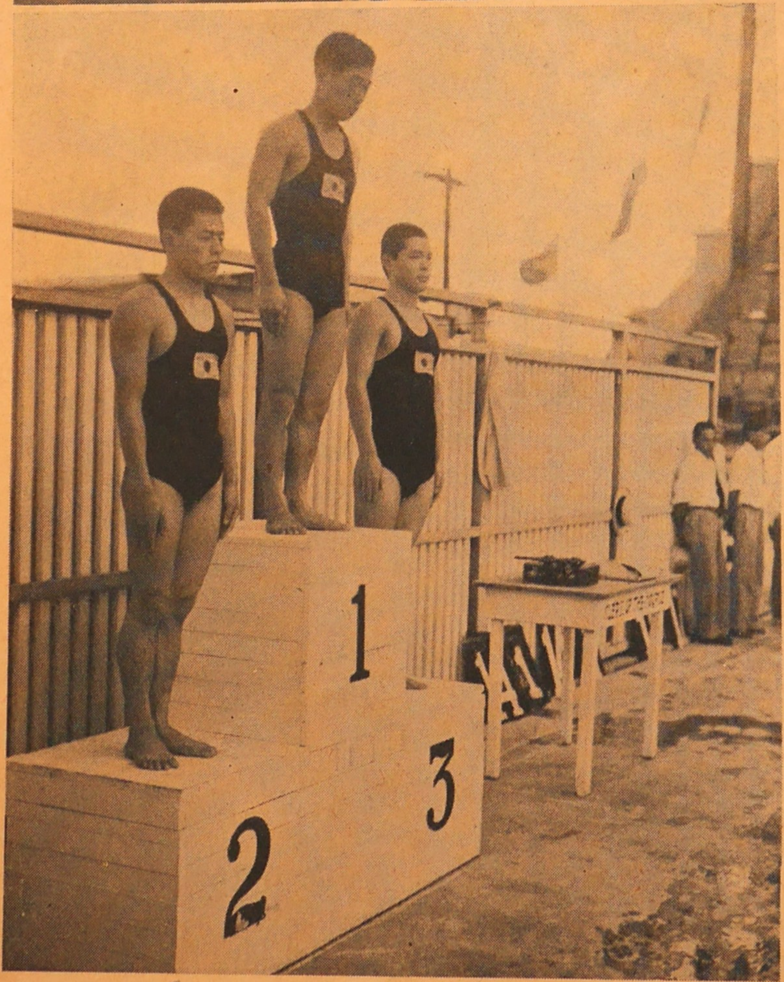
陸上競技はトラックで日本五〇、比島三八、フイルド、日本五一、比島一九、綜合競技、日本一八、比島一三で中華、蘭印は何れも問題でなく、日本が一位を占めたけれど、成績は決して上乘のものではなく、豫期したよりも振はなかつた。（上圖）は一萬五千メートル決勝のスタート



拳闘では我が日本は豫想以上に善戰した。恐らく問題になるまいといはれてゐたものが、試合の結果は良成績で、審判の故意の誤審がなかつたら日本は各級で三人は優勝してゐたであらうといはれてゐる。（中圖）朴（日本）對エルネスト（比島）の試合



日本が極東大會に參加して以來常に振はない排球は今大會でも振はず三位となつた。（第一位中華、第二位比島）然し前回に比してその進境は目覺ましいものがあり、中華に對して一勝を記錄したことは大きな收獲である（下圖）は日本對蘭印の排球試合



水上日本の王座は搖がず
連續「君が代」の奏樂

水上は我が日本の獨擅場だ、比類なき水上日本の威力は、他の追隨を許さず、『無敵』の制覇を成し遂げた。輝かしいその戰績をみれば――五十米決勝に於ては竹村、高橋兩君が一、二着を占め、百米決勝では遊佐、豊田、坂上、高橋の四君が轡を並べてゴールに入り千五百米決勝では牧野、本田、北村、石原田の順で全勝、更に百米背泳決勝では河津、清川、明、入江の順でこれも全勝、八百米リレーも、比島を七十五米も離して大勝した。しかも、竹村、牧野、遊佐、本田、北村、河津の諸君並びに八百米リレーは何れも極東新記錄を出したのである。唯千載の一恨は、二百米平泳決勝において强豪小池選手が、イルデフォンゾに敗れた事である。水上は從來の極東記錄を全部破つた。この極東記錄の更新と全勝を併せて我が選手によつてなされなかつたのが聊か物足りないけれども、然し記錄は全部我が選手によつて出されて居り、その實力は壓倒的なものであつて、堂々と覇者の貫祿を示したものであつた。

（上圖）優勝カップを前にした我が選手

（下圖）千五百米の優勝者――右より北村（三着）牧野（一着）本田（二着）

米國野球リーグ戰始まる

野球の本場、アメリカの職業野球大リーグ戰は、前月號にも御しらせした通り、四月十七日から行はれ、殆んど連日試合が續けられてゐる。この大リーグ戰は大統領が始球式を行ふことが例になつてゐるが、今年も、四月廿六日ワシントンに於て行はれたワシントン、セナトール軍對レッド、ソックス軍試合にルーズヴェルト大統領は始球式を行つた。

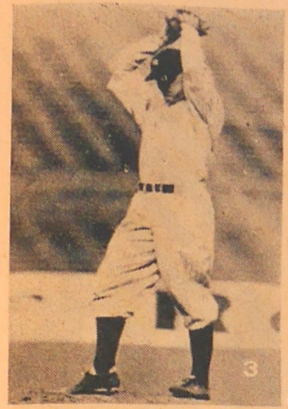
(中圖)は始球式を行ふルーズヴェルト大統領(下圖)四月廿三日ボストンに於て行はれたニューヨーク、ヤンキース對レッド、ソックス軍の試合

× ×

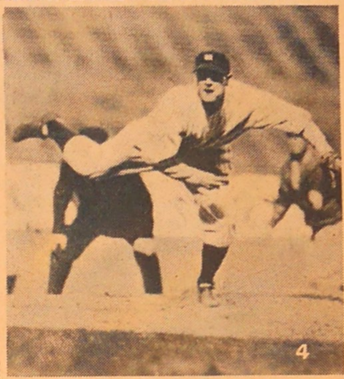
(上圖)はニューヨーク、ヤーキース軍の投手アレン選手の投球モーション

(1)第一球ファウル、捕球の構へ

(2)球をこれてすべりを止める

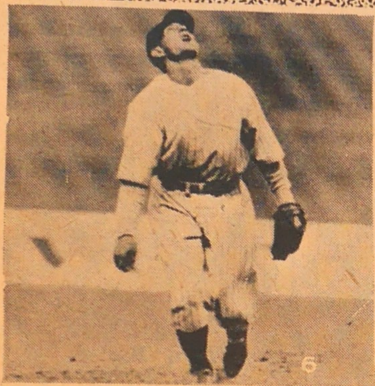


(3)第二球の構へ



(4)第二球！投げました。

(5)打上げました！內野フライ



(6)一壘よりにバック、捕球の構へ、

(左頁寫眞說明)(上より)

(一)早明戰、七回裏、四球に出た早大の鵜飼君二盜に成功

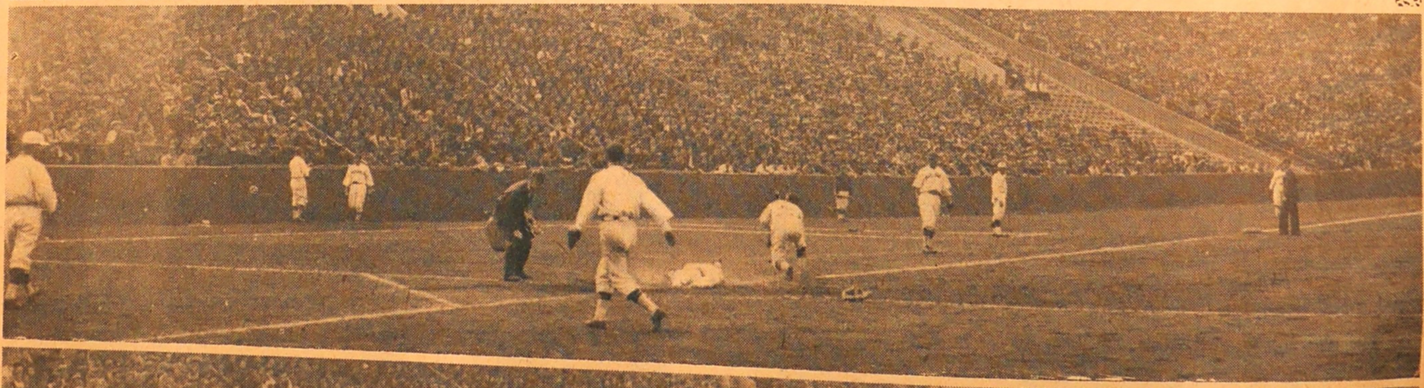
(二)慶明戰、一回裏、四球に出た明大村山君二盜を試みてアウト

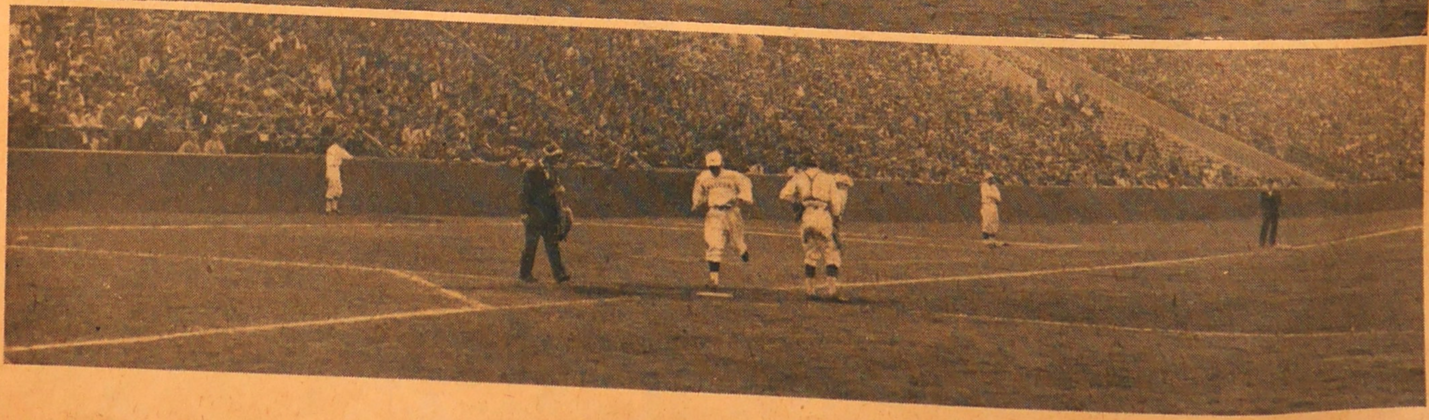
(三)慶立戰、同點のまゝ最終回に入り、慶應櫻井君遊衝失に生き、續く勝川君のバントは內野安打となり、次の山田君のバントで走者二、三壘、次の三宅君の中飛で櫻井君生還、決勝の一點を擧ぐ

(四)早法戰五回裏、中堅前安打に出た早大小島君中堅左翼手の失で一擧本壘を陷る

(五)早法戰七回裏、早大鵜飼君第一球を左翼芝生に入る本シーズン最初のホームランを戛飛ばしてホームイン

六大学リーグ戰のプレーより‥‥（右頁写眞説明參照）





スポーツマン陛下

ーテニスを遊ばされるスウエーデンのグスターフ陛下ー

スウエーデンのグスターフ陛下は、去る二月ダームの險を御登攀中、過つて絶壁から顚落して不慮の御最期を御遂げになつたベルギーの故アルベール陛下と共に、スポーツマン陛下として有名であらせられる。陛下は一八五八年六月十六日の御誕生にあらせられるから、今年七十七才の御老體にあらせられるが、壯者をしのぐ御元氣にあらせられる、スポーツマン陛下と申し上げるだけあつて、凡ゆるスポーツに御堪能にあらせられるが、殊にテニスは御上手で、素人の域を脱してゐられる由である。

寫眞はスウエーデンの首府ストックホルムのテニス、スタヂアムでテニス御練習中の陛下である。

信仰の體驗談を募る

佛教大衆雜誌『大法輪』創刊号に發表

財界政界の巨頭にして疑獄に連坐するあり、教育界の要人にして贈收賄の罪に問はるゝあり、名門の子弟にして君國の大義に悖り逆徒の汚名を冠せらるゝものもある。インテリ層は懊惱焦燥、有閑階級は風紀頽廢、一般社會は動搖不安、今の世の中は一體何處へ漕ぎ着けるのか、抑も又何が彼等をさうさせたか……。

是れ蓋し現代生活の精神的空隙に對する最高指導原理の缺除に因せりと斷言して憚らぬ。然らば何を以つて此の空隙を充足するか、吾人は宗教的大信念の獲得を以てこの缺除を滿たさんとするものである。近く佛教大衆雜誌『大法輪』を創刊して佛教信仰の宣揚弘衍を計らんとするのも一にこの大使命を達成せんが爲である。佛教界幾多の雜誌無きに非ず、而も我が『大法輪』は特に興味を中心として情操陶冶の方面より汎く大衆に呼びかけ、大衆胸奥の琴線にふれ、渇仰に答え興味津々たる小說、戲曲、大衆的讀物、隨筆等によつて自ら公正なる大乘佛教を把握せしめ以つて遍く現代人に堅忍不拔の大信念を獲得せしむるの點において正に空前の偉觀たらしめんとするものである。

心の糧、魂の救ひ、趣味の殿堂、信仰の燈臺として來る九月一日を期し、「大法輪」創刊第一號は現代大衆の前に見參する。本誌「世界畫報」の讀者諸兄においても、「大法輪」の使命に共鳴せられ、兄等の尊き信仰體驗を創刊號誌上に語られん事を切に希ふ次第である。

◎◎懸賞大募集◎◎

「大法輪」創刊號誌上發表すべき左の懸賞文を募集します。

○課題——「信仰の體驗を語る」
自己の體驗した僞りなき事實談にして他人の參考となり。讀者を裨益するもの(文體隨意)

○分量——二千字(四百字詰原稿用紙五枚)以內

○選者——「大法輪」編輯局

○發表——一等より三等までは創刊號に、四等以下順次逐號發表す

○賞典——一等(一名)金參拾圓　二等(二名)金拾五圓宛　三等(五名)金五圓宛　四等以下は掲載の分に限り薄謝を呈す(原稿は返却いたしません。)

○締切——七月十日

東京市麹町區內幸町一ノ三　國際情報社內
佛教閣「大法輪」編輯局

◉外に 短文 和歌 俳句 を募る◉

○用紙はがき　○雅號の外に住所本名を明記の事　○選者大法輪編輯局　○各種とも傑作十名に對して特賞を、其他掲載せる佳作に對しては薄謝を呈す　○大部分は創刊號に掲載し殘部は順次逐號發表す

本誌御購讀の方へ

◆本社名を以て金錢上その他如何はしき申出を爲した者がありましたら、御手數でも一應本社へ直接御照會下さるようお願ひします。近來本社名を利用して種々不都合をなすものがある由ですから特に御注意下さい。

◆本誌配本上其他に付不都合の行爲がありましたら、東京市內は表紙取扱欄に押捺してある番號により、又地方は必ず住所氏名を記載した取扱者の印を押捺させることになつてゐますからそれによつて直接本社へ御申出で下さい。

◆本誌は遲くも毎月十日迄に配本せぬような場合は本社へ御通知下さい。早速便宜の方法で御送りします。

◆本誌は書店で賣らぬことになつてゐますから購讀御希望の方は直接本社に御申込下さるか、全國各地の支局に御申込下さい。

◆本誌の誌代はすべて配本の際引換えに頂く規定になつてゐますが、前金を御拂込下さる際は直接本社宛に願ひます。本社宛直接御拂込以外は一切責任を負ひませんから御承知おき下さい。(御送金は振替東京四五〇〇番を御利用下さることが一番確實です)

定價
一部金六拾錢 一月極金五拾錢　送料二錢
一ヶ年分　金六圓
海外一部送料　金十錢

無斷轉載複製を禁ず

昭和九年六月二十日印刷納本
昭和九年七月一日發行
東京市麹町區內幸町一ノ三
發行、編輯兼印刷人　石原俊明
東京市麹町區內幸町一ノ三
印刷所　國際製版印刷所
東京市麹町區內幸町一ノ三 太平ビル別館
發行所　國際情報社
振替東京四五〇〇番
電話銀座　一一八六 / 一一六〇六

THE PICTORIAL WORLD

【世界畫報】
大正十五年十一月十日第三種郵便物認可　毎月一日發行
昭和九年六月二十日印刷納本　昭和九年七月一日發行

VOL.10. JULY NO. 7

PUB. BY KOKUSAI JOHO SHA TOKYO JAPAN